

育児様式とパーソナリティ(その一)

星 野 命
祖 父 江 孝 男
須 江 江 孝 子
今 井 義 量

序(問題の所在と研究方針)

第一章 育児様式の諸相(1)

—— 基本的生活習慣の訓練をめぐって——

第一節 哺乳と離乳

第二節 排泄訓練

第三節 運動制限の問題

第四節 身体的接触・保護

第二章 育児様式の諸相(2)

—— 社会化の過程をめぐって——

第一節 社会化の手段としてのコミュニケーション

第二節 社会化の場としての家庭

第三節 賞罰(制裁)の諸様式

第四節 親の育児態度の諸様式

結 語

序 (問題の所在と研究方針)

育児の様式 (child-rearing pattern) とその心理学的影響、特に子どものパーソナリティの形成過程に及ぼす影響については、一九三〇年代以来、米国の心理学者と文化人類学者が関心を寄せ、多くの調査が行なわれて来た。周知の如く Kretschmer によって代表されるドイツの心理学界では、もっぱら遺伝的要素を強調していたのに対し、米国では、もともと遺伝とか素質とかいう「超越的な権威」を考えることを余り好まず、むしろ人間は外部からの力によってどのようにでも変化し得る可塑性を持った存在であると考え、傾向が強かったが、このみかたは、一九二〇年代末に盛んとなった Freud の精神分析学と結びつき、乳幼児期の育児様式がパーソナリティの形成の上に甚だ支配的役割を演ずると考える立場が強くなったのである。

この影響が特に強く現われたのは米国文化人類学者の間に於てであり、一九二〇年代末から三〇年代にかけて心理学者と協力して、種々の未開種族の間に於ける文化の特色、パーソナリティの特色を把えてその形成過程を明らかにしようという動きが甚だ盛んとなり、ここに文化人類学の新しい分野として「文化とパーソナリティの研究」なる一部門が設けられるに到ったのである。この尖端を切ったのは Sapir,⁽²⁾ Benedict⁽³⁾ 等であり、心理学

者との協同によるゼミナールもはじめて開かれたが、特に種々の未開種族に於けるパーソナリティの特色を、それぞれの種族に於ける乳幼児期の育児様式によって説明しようとするみかたを強く押出したのは Margaret Mead⁽⁴⁾ であつた。例えばバリー島々民が甚だ孤立的なパーソナリティを持っていることの原因を、その島では母親が子供に対して愛情を向けない、という事実から説明しようとした如きである。このような乳幼児期の重視は更に心理学者 Kardiner により定式化された。すなわち、彼は人類学者 Linton 等と共同で一九三九年に著した『個人とその社会』等⁽⁵⁾に於いて、育児様式を一次的制度 (primary institution) と呼び、種々の神話、説話、儀礼等を二次的制度 (secondary institution) と称し、前者が夫々の種族に於ける住民共通のパーソナリティ——基本的パーソナリティ構造 “basic personality structure” ——を決定し、さらに、この基本的パーソナリティ構造が二次的制度を決定するという理論を提出している。

このような乳幼児期の重視はその後も多くの人々によって受継がれ、例えば Erikson に於ける北米平原インディアン・スー (Sioux) 族のパーソナリティ形成過程の分析 (一九三九年) はその典型であるが、殊にこの問題が大きな関心をよび論議の中心となるに到つたのは人類学者の Gorer や LaBarre 等が一九四二年以降、米國戦時情報局の委嘱によって行なつた日本人国民性の研究をめぐつて⁽⁷⁾であり、日本人の儀礼主義・好戦性の原因を日本人に於ける排便訓練の嚴重さに帰しようとする彼等の結論は、そのまま Benedict の『菊と刀』⁽⁸⁾に受継がれ、日本人のみならず、米國人の間で烈しい批判を生むに到つた。⁽⁹⁾ また同じく Gorer 等による米國国民性の分析、⁽¹⁰⁾ ソヴェエト国民性の分析等⁽¹¹⁾に於いても精神分析の立場から乳幼児期の影響が過大に強調されており、これらに対

する批判がきっかけとなり従来⁽¹²⁾の精神分析的なみかたに対して根本的な反省が一九五〇年頃から急激に強まり始めたのである。

こうして育児様式とパーソナリティの相互関係に関する研究は一九五〇年代から新しい段階へ入ったとみてよい。図式的な精神分析的見地のみ⁽¹³⁾に立つのでなく学習理論をも導入しようという行き方は Whiting 等⁽¹⁴⁾にみられ、この線に沿って世界各地の未開種族に於ける育児型とパーソナリティの相関々係を検定しようとしている⁽¹⁵⁾。最も大きな最近の特色はと言えば、パーソナリティ形成の重要な要因として一応乳幼児期の影響を重視するが、他方成長後に於ける他のいろいろな要因をも同等に考慮に入れている点であって Fromm, Linton, C. Kluckhohn⁽¹⁶⁾等によりはじめて強調されたみかたが現在では一般的な見解となっているのである。

以上のような変遷を経ながら米国では育児様式に関する研究が盛んに行われている現状であるが、この点についてわが国の状況は如何であろうか。終戦後、育児とパーソナリティに関する米国学界に於ける諸傾向が紹介されたが、多くの場合、それは単なる紹介に留まり、日本の農村に於ける育児様式に関する実態調査は人類学者によっても心理学者によっても殆んど行われていなかった。これは、人類学者の場合はその主な関心を日本以外の未開社会に向けていたためであり、又日本国内へ向けた場合もその焦点が社会構造や儀礼、祭祀等⁽¹⁷⁾にあったという事情に基づくが、比較的「育児」の問題に古くから関心を向けていた民俗学 (folk-lore) に属する人々の場合も興味⁽¹⁷⁾の中心はむしろ育児に関連する特異な儀礼、祭祀等⁽¹⁷⁾にあったわけである。他方心理学者の側⁽¹⁷⁾にあっては最近まで都会児童——しかも中産階級以上——のみが視野に入っており、農村まで足を伸ばそうとする努力は殆んど

皆無と言ってもよい状態であった。しかし、最近に到って、九学会連合の主権等による奄美大島⁽¹⁸⁾その他の実態調査への参加が見られるようになり、殊に数年前以来、教育社会学、教育心理学の面からのアプローチが次第に活発に行われ始めた。一方やや異なった立場から農村での育児問題に対して最も早くから関心を向けてきたのは小児科医学の人々で、特に種々の疾患との関連を中心として多くの研究がなされている。⁽¹⁹⁾ また、戦後日本を訪れた米国人類学者、たとえば Lanham,⁽²⁰⁾ Norbeck 夫妻等⁽²¹⁾により日本の育児様式に関する調査報告が既に発表されている。以上述べたように日本の育児様式についての研究は最近次第に増加してきているのであるが、これらに共通して見られる欠陥として、育児様式と socio-cultural structure との関連について分析が充分されていないこと、また多くの場合、育児様式の記述のみに終始して種々の因子の持つ心理学的影響については分析が及んでないことの二点があげられよう。そこで筆者等は従来の欠陥を出来るだけ補なう目的をもって文化人類学(祖父江、今井、須江)と心理学(星野)の双方からの共同(いわゆる interdisciplinary collaboration)によるチームを作り、長野県西筑摩郡開田村^(かいたむら)のインテンシヴな調査を始めた。この村に於いてはある時代から、子供を出生後平均約一カ年前後の間エジコ(藁製の哺育籠——この地方の方言ではイズミ又はコシキという)に緊縛して入れておく風習があり、次第に減少しながらも、尚現在残っているものでこのエジコ使用の育児慣習を中心に調査をすすめ、特にエジコが及ぼす種々の影響について分析を行なった。エジコは北米インディアンの間に於ける一種のユリカゴと極めて類似し、ユリカゴのもたらす心理的影響については米国人類学者、心理学者の間でくり返して論ぜられた所だからである。こうして今日までにわれわれの行った調査は次の三種である。

(1) 日本に於けるエジコの分布、地域的変異、文化史的意義等の総括的研究（祖父江、須江の他、村上泰治が参加）

(2) 育児様式全般に関して従来行われた内外の文献に関する整理、研究（全員）

(3) 開田村に於ける育児様式とその影響（全員）

上の中(1)については既に他の場所で発表した⁽²²⁾。本稿に於いては(2)の文献研究を本号掲載の第一部に、(3)を次号掲載の第二部に於いて報告することにしたい⁽²³⁾。文献研究については、未だ不完全な点が少くないが、これらについては後日更に補足することにして今日までに調査した文献を出来るだけ短かくまとめて報告することにする。これの執筆に当っては序、及び第一部第一章を祖父江が、第二章を須江及び星野が、また全体の統一を星野が分担した。序章の終に臨み、文献調査の段階に於いて種々御便宜を賜わった磯田仙蔵（東京女子医大小児科教室）、馬場一雄（東大小児科教室）その他の諸氏に厚く御礼申上げたい。

（尚本稿においてパーソナリティの語を種族民、部族民など集団に関して用いている場合は、米国人類学者の間で広く用いられている「最頻的パーソナリティ“modal personality”」の意味に用いる。DuBoisにより提案された⁽²⁴⁾もので、先述のKardinerによる「基本的パーソナリティ構造」の語や、Frommの「社会的性格“social character”」⁽²⁵⁾などの語と同義であるが、種々の点からみてこれが最も適当と思われるので採用したものである。集団の成員の「パーソナリティ中の共通部分“common aspects of personality”」⁽²⁶⁾とKluckhohn等の語が説明として最も妥当であろう。）

(註)

(1) この点については次を参照した。

島崎敏樹「ドイツとアメリカの人間観——精神病理学から——」『季刊・社会学』四号、一九五〇。

(2) Sapir, E. "The Unconscious Patterning of Behavior in Society" (in) Child, C. M. (et. al.) eds. *The Unconscious, a Symposium*, 1928.do. "Cultural Anthropology and Psychiatry" *Journal of Abnormal and Social Psychiatry*, 12, 1932.do. "The Emergence of the Concept of Personality in a Study of Cultures" *Journal of Social Psychology*, 5, 1934 (西上田邦子訳 Mandelbaum, D. G. ed. *Selected Writings of Edward Sapir in Language, Culture and Personality*, 1951. 中込啓蔵)(3) Benedict, R. "Psychological Types in the Cultures of The Southwest" *Proceedings, International Congress of Americanists*, 23, 1928.do. "Configurations of Culture in North America" *American Anthropologist*, 34, 1932.do. "Anthropology and the Abnormal" *Journal of General Psychology*, 10, 1934.do. *Patterns of Culture*, 1934.(4) Mead, M. *Coming of Age in Samoa*, 1928.do. *Growing Up in New Guinea*, 1930.do. *Sex and Temperament in Three Primitive Societies*, 1935; Bateson, G. & Mead, M. *Balinese Character: A Photographic Analysis*, 1942.(5) Kardiner, A. *The Individual and His Society: The Psychodynamics of Primitive Social Organisation*, 1939.do. *The Psychological Frontiers of Society*, 1945.(6) Erikson, E. "Observations on Sioux Education", *Journal of Psychology*, 7, 1939.

- do. *Observations on the Yurok: Childhood and World Image* (University of California Publications in American Archaeology and Ethnology No. 10), 1943.
- do. "Childhood and Tradition in Two American Indian Tribes" (in) *The Psychoanalytic Study of the Child* Vol. 1 1945 (reprinted in Haring, D. G. ed. *Personal Character and Cultural Milieu*, 3rd. ed. 1956)
- do. *Childhood and Society*, 1950.
(草野米三良訳『幼年期と社会』三卷'一九五四—五六)
- do. "Growth and Crises of the 'Healthy Personality'" (in) Senn, M. ed. *Symposium on the Healthy Personality* 1950 (reprinted in Kluckhohn, C. et. al. eds. *Personality in Nature, Society and Culture*, 1953)
- (7) Gorer, G. "Themes in Japanese Culture" *Transactions of the New York Academy of Sciences*, 5, 1943.
- LaBarre, W. "Some Observations on Character Structure in the Orient: The Japanese" *Psychiatry*, 8, 1945.
- (8) Benedict, R. *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture*, 1946 (長谷川松治訳 一九四九)
- (9) 『民族学研究』一四卷四号。一九五〇(『菊と刀』特集号——川島武宜、南博、有賀喜左衛門、和辻哲郎、柳田国男 共同執筆。)
- Bennett, J. W. & Nagai, M. "The Japanese Critique of the Methodology of Benedict's *Chrysanthemum and the Sword*", *American Anthropologist*, 55, 1953.
- Kerlinger, F. N. "Behavior and Personality in Japan: A Critique of Three Studies of Japanese Personality", *Social Forces* 31, 1953.
- Haring, D. G. "Japanese National Character: Cultural Anthropology, Psychoanalysis and History", *Yale Review* 42, 1953 (reprinted in Haring, D. G. ed. *Personal Character and Cultural Milieu* 3rd. ed. 1956)

- (9) Gorer, G. *The American People*, 1948.
- (10) Gorer, G. & Rickman, J. *The People of Great Russia*, 1950.
- (11) 次七年七題(註本)
- (12) Orlansky, H. "Infant Care and Personality", *Psychological Bulletin*, 46, 1949 (reprinted in Martin, W. E. & Stendler, C. B. eds. *Readings in Child Development*, 1954)
- Lindesmith, A. R. & Strauss, A. L. "Critique of Culture-Personality Writings", *American Sociological Review* 15, 1950.
- Inkeles, A. "Some Sociological Observations on Culture and Personality Studies", (in) Kluckhohn, C. et. al. eds. *Personality in Nature, Society and Culture*, 1952.
- Honigsmann, J. H. *Culture and Personality*, 1954.
- Inkeles, A. & Levinson, D. J. "National Character: The Study of Modal Personality and Sociocultural Systems", (in) Lindzey, G. (ed.) *Handbook of Social Psychology* Vol. II, 1954.
- Kluckhohn, C. "Culture and Behavior", op. cit., 1954 (特に pp. 949—950)
- do. "Southwestern Studies of Culture and Personality", *American Anthropologist* 56, 1954.
- (13) Whiting, J. M. et. al. *Field Manual for the Cross-Cultural Study of Child Rearing*, 1953.
- Whiting, J. M. & Child, I. L. *Child Training and Personality: A Cross-Cultural Study*, 1953.
- (14) Fromm, E. "Psychoanalytic Characterology and Its Application to the Understanding of Culture", (in) Sargent, S. S. et. al. eds. *Culture and Personality*, 1949.
- (15) Linton, R. *Cultural Background of Personality*, 1945. (清水幾太郎・犬飼康彦訳)『文化人類学入門』一九五〇
- (16) Kluckhohn, C. & Mowrer, O. H. "Culture and Personality: A Conceptual Scheme", *American Anthropologist* 46, 1944.

Leighton, D. & Kluchohn, C., *Children of the People: The Navaho Individual and His Development*, 1948.

- (17) これらについては従来の諸研究を祖父江がまとめて左の如く発表した。
「育児様式の文化人類学的研究(3) 乳児期に於ける諸儀礼の総合的研究」、第十三回日本人類学会・日本民族学協会連合大会、一九五八。
- (18) 森重敏、三輪正「沖永良部島々民のパーソナリティ」『人類科学』十号、一九五八。
- (19) これについては第一章にかかげる文献を参照。
- (20) Lanham, B. "Aspects of Child Care in Japan: Preliminary Report", (in) Haring, D. G. (ed.) *Personal Character and Cultural Milieu*, 3rd ed., 1956.
- (21) Norbeck, E. & M. "Child Training in a Japanese Fishing Community", (in) Haring, D. G. ed. op. cit.
- (22) 祖父江、須江、村上泰治「エシコに関する文化人類学的研究——分布及地域的変異について」『人類学雑誌』六六巻、二号、一九五八。
祖父江「エシコについて——その分布と人類学的意義」『小児科診療』一一巻、七号、一九五八。
- (23) この一部は左の如く発表された。
須江ひろ子、星野命「育児様式の文化人類学的研究(1) 長野県小開田村に於けるエシコ使用様式と、その発達心理的問題」、第十三回日本人類学会・日本民族学協会連合大会、一九五八。
- (24) Du Bois, C. *The People of Alor: A Social-Psychological Study of an East Indian Island*, 1944, p. 2 ff.
- (25) Fromm, E. *Escape from Freedom*, 1941 (日高六郎訳『自由からの逃走』一九五一)
- (26) Kluchohn & Mowrer, op. cit.

第一章 育児様式の諸相 (I)

——基本的生活習慣の訓練をめぐる——

第一節 哺乳と離乳

Freud は、彼のいうリビドー（性的エネルギー）の最も直接に現われたものが性器感覚であり、その昇華したものが愛情の如きものであると考え、この二者の中間に「性器外の性感覚」をみとめ、口唇粘膜、肛門などは、それぞれ食べる、排泄するという機能の他に性的感覚を味わう機能を持つことを主張した。従って、乳児期に於ける哺乳や排便などは、それぞれ口唇粘膜、肛門粘膜を満足させる役割も果すのであり、これらの満足感の充足度が成長後のパーソナリティに強い影響を与えることを主張した。肛門感覚の問題については第二節の所で述べる。口唇粘膜による満足が不充分であった時（哺乳が不充分、離乳が早く急激であったなど）には外界に対して不信の念を抱き、不安な気持、憂鬱感を伴なう。これを「口唇ペシミズム」(oral pessimism) と言い、逆に口唇粘膜が充分満足させられすぎると（例えば哺乳の時期が長すぎると）自分の努力なしでものを他から得ることを期待し、外界に随属的になりすぎる。これを「口唇的オプティミズム」(oral optimism) とよぶ。上記二つの性格を共に「口唇的性格」(oral character) と称する。

このような Freud の性格論は一部の米国心理学者によって受け継がれ、哺乳の問題が一九四〇年頃から著し

く重視されるようになったが、さきにも述べた Erikson の場合は、正統的 Freud 理論を主張した典型的な例である。例えば北米スー族の太陽踊り (Sun Dance) に於て、若者達がめいめいの胸に革紐をさし通して広場中央の柱にむすびつけ、自虐的な踊りにふけることの原因を解釈して、ここでは生後六カ月になって歯が生え母の胸にかみつこうとすると、頭を叩かれてしりぞけられるようになり、母の胸に噛みつきたいという欲求が自己の胸へ向けられるのだと説いている如きである。⁽¹⁾

このように極端ではないにせよ、やはり同じ立場に立ったのは Ribble であり乳児にとり必要な第一の事項として、乳児の欲するままに哺乳すること。離乳を成可く遅く而も徐々に行なうこと。排泄のしつけを遅くすることなどを提唱した。⁽²⁾ こうして、欧米に於てその当時迄行われていた極めて厳格な時間ぎめ哺乳に対する反対論がここに唱えられるに到り、何れを採るべきかについて甚だ論議が起つたのである。併し、哺乳方法の心理的影響に関する精神分析的な理論は何れも厳密に実証されたものではなく、単なる仮説的な段階に留まっていたと言ってもよい。僅かに心理学者の Goldman-Eisler がロンドン在住の一一五名の学生その他について質問紙法による調査を行なった所、早期の離乳と口唇的ペシミズムの存在の間に相関を見出しているが⁽³⁾ 調査方法その他に尚疑問がある。この調査以外では Orlandy が哺乳とパーソナリティの関係について、従来なされた心理学者、文化人類学者の諸報告を検討し、その大部分が実証的研究でないことを指摘している。⁽⁴⁾ 併しその後 Sewell は米國農家の五―六歳児一六二名についてパーソナリティ・テストを行ない、各自の母親に面接して収集した乳幼期の育児と比較しているが、哺乳方法とパーソナリティとの相関が殆んどみられないことを結論している。⁽⁵⁾ 他方 Sears

等は、アメリカ・カンサス市の児童八〇名について調査し、離乳の時期と emotional disturbance との間に相関があることを結論しているが、⁽⁶⁾これに対して Whiting は、世界の未開民族のデータも加えて比較検討してみると決してこのような結果にはならぬことを指摘している。⁽⁷⁾尚この Whiting 等は離乳時期が、guilt-feeling の強さと相関を持つことを世界の未開民族のデータに基き結論しているが、⁽⁷⁾この場合 guilt-feeling の指標としては、それぞれの社会で病気になった時、患者自身の責任を如何に強く考えるかという点を取りあげており、いわば病気に対する俗信や慣習的態度の型を Kardiner 流に projective system として考えているのであって、ここに多くの問題が存在する。⁽⁸⁾尚 Spiro 等も最近哺乳様式と超自然観との間の相関の存在を未開社会のデータに基いて見出しているが⁽⁹⁾同様の問題が起ってくるといえよう。

日本においては、石黒大義・旭妙子が上記 Sewell の研究計画を参考として、(1) 授乳の種類は母乳か人工栄養か (2) 哺乳の方法は時間決めか不規則かの保育態度を面接調査によって調査し、幼稚園教師の評価した子どもの二十六箇の性格特徴との関係をしらべている。⁽¹⁰⁾そして、(1) については全く相関が見られず、(2) については、規則的授乳群の方に、ハンカチや服の端などを噛む行為が多く、また女兒においては、他人の前へ出ると恥しがる傾向を見た。

このように哺乳の方式がパーソナリティ形式に与える影響について Freud の唱えたような主張は多くの行きすぎた仮説を含んでいたと考えてよいであろう。しかし、そうかと言って授乳方式が全く心理的影響を与えないとも云い得ないのであって、何らかの影響は充分考えられる。特に哺乳の際に於ける母子間の心理的關係はむしろ

る重要因子としてとりあげられ得るだろう。いいかえれば哺乳は母子間に於ける愛情のコミュニケーションの通路 channel としての意義を持つものであり、この通路の状況如何が心理的影響をもたらすことは充分予測されるのである。

従って哺乳方法に於ても規則正しい習慣を作るため、また栄養不足におち入ることなきよう生活時間のリズムに応じた哺乳が望ましいのであるが、その際あまりに神経質に一般的な規準をどの子どもにもおしつけようとすることは、避けるべきであるという点が最近の米国の育児法において強調されている。これは、一般にきわめて規則的計画的哺乳が行われ、また人工栄養法が、それを補強している米国の現状にあって、子どものパーソナリティに好のましくない影響を与えるという観点からの反省であろう。今日の日本では、都市においても農村においても規則的哺乳の高率を証明するデータはないが、ただ人工栄養法の普及に伴う問題として今後、注目してゆくべき見解であろう。なお、哺乳に於ける母子間の心理的通路 channel の型とパーソナリティに及ぼす影響との相関については、その調査方法が困難なため従来僅かな実証的研究しか行われていないが、われわれの調査にあたっては出来る限りこの点にも重点を置いて分析を行なっている。

尚この点に関連してくるが離乳について、上記の研究 Goldman-Eisler に於て指標としてとりあげられた離乳の時期のみでなく、離乳の急激さ、厳しさが問題にされるようになってきた。この点から最も新らしい研究を行なったのは上記の Whiting 等であり、世界の未開民族のデータに基き、離乳のきびしい種族では口唇的満足を避けようとする一種の fixation がパーソナリティの中に見られることを相関係数の計算によって結

論しているが、この際もパーソナリテイの中に fixation を見出す指標としてはパーソリナティ・テスト等を使用せず、そのパーソナリテイの反映した結果としてそれぞれの社会に存在する俗信をとりあげており、ここにもさきにあげたような問題が存在する。日本においては、前記石黒、旭が(1)哺乳期間と(2)離乳が突然になされたか、徐々になされたかの二項目について幼児の性格特徴との間の有意差検定を行い、四十二名の幼時の離乳期が生後九カ月から三年までの間に分布し、平均一年六カ月であることから、早遅それぞれの極から三分の一ずつ二つの群を作り比較した結果、早期離乳の育児法をうけたものの方に、偏食が多く、また女兒において従順性が低く、情緒安定度が高いという傾向がみられ、突然離乳されたものの方は、徐々に離乳されたものより自己主張が少く、女兒においては攻撃性が大であることを結論している。しかし、この研究は、石黒・旭が自認しているように、標本数及其の社会的背景、条件の統制、使用したパーソナリテイ測定法等について問題がある。とにかく最近の傾向としては離乳を同じく母子間の心理的通路として考え、離乳の影響も単に口唇粘膜の満足、不満足の領域に限って扱わず、母子間の心理的關係に関する体験の問題として扱われるようになってきた⁽¹⁴⁾ことを指摘しておこう。

尚参考迄に世界の未開社会に於ける離乳完了の時期⁽¹⁵⁾を示せば、

最 遅	インドのチェンチュ族 (Chenchu)	五—六才
	同じく レプチャ族 (Lepcha)	三才又はそれ以下
最 早	ポリネシアのマルキサス島民 (Marquesan)	六カ月以内
	グアム島のチャモロ族 (hamorro)	同 右

米国については平均半年と称される。

(全部の平均三・五才)

次に日本に於ける離乳については次に示す通りである。

まず第一表は東京都内各地区別に見たもので、主に中産上層の住宅地である中央部に於て離乳が最も早く、次いで中産上層、中産下層を含む西武地域が早く、同じ東京市区内でも東部地区では甚だ遅くなっていることは注目される。又、一九五一年と五三年を比べてみると、この二年間に離乳開始時期には余り変化がないが完了時期に於ては市部に於て六カ月、他地区では中央部の二カ月を除いては何れの地区でも四カ月早くなっており最近の傾向がよくうかがわれて興味深い(なお、数年早く行なわれた海老沢氏の調査では都市の離乳の平均が十六カ月であり、次第に早くなっていることがうかがわれる)。東京以外の農村については現在手元に僅かなデータしかないが、離乳開始完了とも東京よりやや遅く夫々八カ月、十七―十八カ月であることが判る。奄美では二〇カ月であるが、何れにせよデータが甚だ少ないので今後各地の調査により地区別の差異の有無が見出せることが望ましい。

石黒大義は、名古屋市中心とする地域の二三家庭について、社会階層別による乳幼児の基本的生活習慣のしつけ方の差違を調査したが、離乳完了の時期は、いずれも大体、一六・七カ月頃であることを見出している。⁽¹⁹⁾

最後に、同じく口唇粘膜の満足の問題に関連して、人工哺乳による場合の心理的影響、口唇的フラストレーションを与えた場合の「指しゃぶり」の発生――の問題が精神分析学者によって唱えられてきたが、これも多くの

第一表 東京に於ける離乳時期

(東京都衛生局公衆衛生部調査による)(12)

	1951年		1953年	
	離乳開始	離乳完了	離乳開始	離乳完了
中央部(千代田, 中央, 港, 新宿) 文京の各区	0—7	1—4	0—7	1—2
東 部(台東, 墨田, 江東, 荒川) 足立, 葛飾, 北, 江戸川) 各区の	0—8	1—10	0—8	1—6
西 部(品川, 目黒, 大田, 世田) 谷, 渋谷, 中野, 杉並, 豊島, 板橋, 練馬の各区	0—7	1—6	0—7	1—2
市 部(青梅, 八王子, 立川, 武) 蔵野, 三鷹の各市	0—8	1—10	0—7	1—4
郡 部	0—8	1—10	0—8	1—6
島 嶼	0—8	1—10	0—7	1—6

(数字は該当者が 50% 以上に達した時の年月数を示す)

(被調査者数 1951: 136,009人
1953: 116,406人)

第二表 各地農村に於ける離乳時期

(石川淳一, 高木泰, 森重敏, 三輪正氏等の調査による)(13)

	離乳開始	離乳完了
東 北 全 域	0—8	1—5 (1954)
埼 玉 県	0—8	1—6 (1955)
奄 美 大 島 (沖永良部島)	—	1—8 (1957)

(数字は該当者が 50% 以上に達した時の年月数を示す)

研究の結果必ずしも実証されることが明らかになってきた⁽²⁰⁾。これらの問題も単なる口唇粘膜の満足の問題をはなれて母子間の人間関係を考慮に入れて考察するべきであらう。

(註)

- (1) Erikson, E. H. *Childhood and Society*, 1950 (p. 132)
草野栄三良訳『幼年期と社会・前篇(性と文化の錯綜)』(二一〇—二二二頁)
- (2) Ribble, M. A. "Infantile Experience in Relation to Personality Development" (in) Hunt, J. M. ed. *Personality and Behavior Disorders*, 1944.
- (3) Goldman-Eisler, F. "Breast Feeding and Character Formation" (in) Kluckhohn, C. et. al. (eds.) *Personality in Nature, Society and Culture*, 1953.
- (4) Orlansky, H. "Infant Care and Personality" *Psychological Bulletin*, 46, 1949, (reprinted in Martin, W. E. & Stender, C. B. eds. *Readings in Child Development*, 1954).
- (5) Sewell, W. H. "Infant Training and the Personality of the Child" *American Journal of Sociology*, 58, 1952.
- (6) Sears, R. R. & Wise, G. W. "Relation of Cup Feeding in Infancy to Thumb-Sucking and the Oral Drive", *American Journal of Orthopsychiatry*, 20, 1950.
- (7) Whiting, J. W. M. "The Cross-cultural Method" (in) Lindzey, G. (ed.) *Handbook of Social Psychology*, Vol. I, 1954.
- (8) Kardiner, A. *The Individual and His Society: The Psychodynamics of Primitive Social Organization*, 1939.
do. *The Psychological Frontiers of Society*, 1945.

尚 Kardiner の projective system の考えに対する批判としては、例えば

- Hoebel, E. A. "The Nature of Culture" (in) Shapiro, H. L. (ed.) *Man, Culture and Society*, 1956.
- (9) Spiro, M. E. & D'Andrade, R. G. "A Cross-Cultural Study of Some Supernatural Beliefs", *American Anthropologist*, 60, 1958.
- (10) 石黒大義・旭妙子「乳児期の育て方と人格形成」『児童心理と精神衛生』、第四巻第五号(23)、一九五四、六一—四四頁。
- (11) Honigmann, J. J. *Culture and Personality*, 1954 (p. 243)
- (12) 森重静夫「母乳栄養法についての一考察」(日本小児科学会第五四回総会『日本小児科学会雑誌』五五巻四号 一九五一年)においては時間授乳と無制限授乳の二群を分けて比較してみると前者の方が四乃至六カ月以後に於て顕著に栄養状態がよく、罹病率も少ないことが報告されている。
- (13) Whiting, J. W. M. & Child, I. L. *op. cit.*
- (14) Honigmann, J. J. *op. cit.* (p. 148) 例えば平野春雄氏は離乳直後、そのフラストレーションの結果「伏せ寝」が多くあらわれることを報告しておられるが(「離乳の乳幼児期精神・身体・発育に及ぼす影響」日本小児科学会第五四回総会、『日本小児科学会雑誌』五五巻四号、一九五一)このような心理的影響がいつまで残存するかが問題となる。
- (15) Whiting, J. W. M. *et. al. op. cit.* (p. 71)
- (16) 山下俊郎「幼児期の生活指導」『生活指導と性格教育』(東京文理大児童研究会編・児童心理叢書八巻) 一九四九、一三一頁。
- (17) 東京都衛生局公衆衛生部『昭和二十六年に於ける東京都乳幼児一斉検診成績』一九五二
同『昭和二八年度に於ける東京都乳幼児一斉検診成績』一九五四
- (18) 石川淳一「東北地方乳幼児の実態」日本小児科学会五七回総会(『日本小児科学会雑誌』五八巻八号) 一九五四
高木泰「農村の離乳の実態」『小児保健研究』一四巻三号、一九五五
森重敏、三輪正「沖永良部島々民のパーソナリティ——その形成過程を中心として——」『人類科学』十号、一九五九

尚 Lanham, B. "Aspects of Child Care in Japan: Preliminary Report" (in) Haring, D. G. (ed.) *Personal Character and Cultural Milieu 3rd ed.*, 1956 に於ては和歌山県海南市に於ける調査報告がなされているが、これによると離乳開始が十五カ月乃至二〇カ月、完了期が二一カ月乃至二六カ月であり、他の地区の報告より著しくおかれており、或は調査過程上に於ける誤りと思われる点もあるので考慮の外におくこととした。又愛育研究所により『農山漁村母性及乳児の栄養に関する調査報告』が一九四三年に発表されているが統計的調査がなされていないのは遺憾である。

(19) 石黒大義「母子関係の心理学的研究」(その一)―乳幼児期のしつけ方の実態―『名古屋大学教育学部紀要』一卷、一九五五、七四―八六頁。

(20) 長島貞夫『児童社会心理学―性格の社会的形成』一九五六、一二二―一二三頁、一二六―一二八頁。

第二節 排泄訓練

第一節にのべた如く、Freud は口唇粘膜の満足の問題と共に肛門粘膜の満足の問題をとりあげ、乳幼児期にあまり早くから排泄の訓練 (toilet-training) が嚴重になされる時は極度の compulsiveness, 整頓好き、過度の几帳面さ、形式主義の性格、更にはサディズムの性格が生れるとしてこれを「肛門的性格」(anal character) とよんだ。このような Freud の理論も又米國心理学者の間に受け継がれ、例えば Frank はあまりに強制的な排泄のしつけを避けるべきだとし、⁽¹⁾ 先述の Ribble も早期の強制的な排泄訓練を避けることを強調している。⁽²⁾ また Erikson もそのパーソナリティ形成論の中で排泄訓練を重視して扱っている。⁽³⁾

このような排泄訓練の効果の精神分析的解釈が特に多くの注目を浴び論議的となるに到ったのは、既に述

べたように Gorer & LaBarre が日本人の国民性——特にその儀礼主義や “compulsiveness” の原因を論じて、それは日本人についてなされる余りに早い嚴重な排泄訓練にありと結論した時⁽⁴⁾であった。当時は尚、日本での排泄訓練が果して本当に早いか否かも明らかにってはいなかったのであるが、とにかく一国の国民性の特色の原因を排泄訓練のみで割切ろうとした点については多くの非難が集中した⁽⁵⁾。その後日本に永く滞在したことのある Haring は一般的な印象から日本の排泄訓練が決して早くも厳しくもないことを指摘し、Gorer 等の説は現在では否定され、パーソナリティに及ぼす排泄訓練の影響そのものも殆んどかえりみられていない。前述の Sewell は五―六歳児を排泄の訓練の早いものと遅いものとの二群に分け心理テストによって両者のパーソナリティの比較を試みたが、精神分析学でいわれるような特徴は見出されなかった⁽⁶⁾。

また石黒、旭らは、排泄訓練の開始が早いか遅いか、排泄訓練中の失敗に対して体罰を加えたか何もしなかったかなどの二項目と二十六個の性格特徴との関係についても、面接・評定による調査を行っており⁽⁷⁾、早期に排泄訓練を開始された幼児群と遅く開始された群の間に殆んど差が見られなかったこと、また失敗に対して体罰を加えられた群では、何も罰を加えられなかった群に比べて全体として気が散り易く、物事に倦き易い特性が見られたこと、男児のみについては、持物を大切にするという傾向がみられ、女児のみについては、家の中と外とで態度が変り易いことを報告している。そして、先に記した哺乳・離乳と幼児の性格特徴との間の検定結果とあわせて、合計七八〇箇のカイ検定のうち、五パーセント水準で有意差がみられたものが僅かに十五箇にすぎないことから、乳幼児期の基本的な生活習慣のしつけ方と、幼児の性格特徴の間には、積極的な関係は見出せないというこ

とを一応結論している。(しかし、この研究の不備な点については既に記したところである。) 要するに排泄訓練でも重要なのは母子間の人間関係全般なのであり、例えば Honigmann の指摘する通り、厳格な排泄訓練が “compulsiveness” を生み出すのではなく、“compulsive” な家庭の雰囲気全般の結果として厳格な排泄訓練も生れるし、他方では compulsive なパーソナリティも生れるのである。⁽⁸⁾

次に世界各地の未開社会に於ける排泄訓練開始時を示すと左の通りである。⁽⁹⁾

最 遅 アフリカのベナ族 (Bena) 五 才

最 早 マダカスカル島のタナラ族 (Tanala) 六カ月

大体は一才半乃至二才半 (平均二才)

米国では平均六カ月

日本における排泄訓練については上述のように Gorer, LaBarre によって米国内で多くの関心をひき、⁽¹⁰⁾ Haring によってその滞日中の印象的観察から「決して早くも厳重でもない」と指摘されているが、⁽¹¹⁾ 正確な実態調査は未だ殆んど行われていない。Sikkema はハワイ在住の日本人について調査をなし、日本人の間では欧米的な意味に於ける秩序立った排泄訓練の存在せぬことを結論しているが、⁽¹²⁾ この表現は一面真をついているとはいえ、その調査対象は明治年間に渡航した日本人移民であり、現在の日本社会に於ける排泄訓練を論ずる際にはそのままあてはまらない。

前節にふれた石黒は、名古屋市を中心にして都市の家庭について排便排尿の開始と完了、子どもが失敗した際の罰を調べ、米国における調査結果とを比較しているが、⁽¹³⁾ 顕著な相違として、わが国では排尿訓練の方が排便訓

練よりも早く完成していること(米国では全く逆になっている)をあげ、明らかに類似しているものとして、排便訓練の開始が大体八・九カ月頃であり、完了は一七・八カ月であることを見た。しかし、これは、日本の一都市のサラリーマン階層・中小企業者階層・労働階層と、米国はシカゴの白人及び黒人の中産・下層階級との比較であって、なほ一般論を導くことは困難である。

われわれとしては、日本農村各地におけるこの点の調査の必要を感じるものであるが、哺乳法と異って小児科医の注意をあまり惹かないのと、調査困難の故もあって、農村におけるデータは、九大医学部小児科の溝口ミツが、昭和三十年大分県の農山漁村の乳児約三五〇人について調査したものに止まるのは遺憾である。⁽¹⁴⁾

(註)

- (一) Frank, L. K. "Cultural Coercion and Individual Distortion", *Psychiatry* 1, 1939.
- (二) Ribble, M. A. "Intantile Experience in Relation to Personality Development", (in) Hunt, J. M. ed. *Personality and the Behavior Disorders*, 1944.
- (三) Erikson, E. "Growth and Crises of the 'Healthy Personality'", (in) Senn, M. ed. *Symposium on the Healthy Personality*, 1950 (reprinted in Kluckhohn, C. et. al. eds. *Personality in Nature, Society and Culture*, 1953).
- (四) Gorer, G: "Themes in Japanese Culture", *Transactions of the New York Academy of Sciences* 5, 1943.
La Barre, W. "Some Observations on Character Structure in the Orient: The Japanese", *Psychiatry* 8, 1945.
- (五) 例として Kluckhohn, C. *Mirror for Man: The Relation of Anthropology to Modern Life*, 1949 (p.200).
- (六) Sewell, W. H. "Infant Training and the Personality of the Child", *American Journal of Sociology* 85, 1945.

1952.

- (7) 石黒大義、旭妙子「乳幼児の育て方と人格形成」『児童心理と精神衛生』第四卷第三号(21)、一九五四年、一—四頁。
- (8) Honigmann, J. J. *Culture and Personality*, 1954 (pp. 257—259).
- (9) Whiting, J. W. M. & Child, I. L. *Child Training and Personality: A Cross-Cultural Study*, 1954 (p. 74).
- (10) Gorer, op. cit.; La Barre, op. cit.
- (11) Haring, D. G. "Japanese National Character: Cultural Anthropology, Psychoanalysis and History", *Yale Review* 42, 1953 (reprinted in Haring, D. G. ed. *Personal Character and Cultural Milieu*, 3rd ed., 1956).
- (12) Sikkema, M. "Observations on Japanese Early Child Training", *Psychiatry* 10, 1947 (reprinted in Haring, D. G. ed. *Personal Character and Cultural Milieu*, 2nd ed., 1948).
- (13) 石黒大義「ハ母—子関係Vの心理学的研究(その一)—乳幼児期のしつけ方の実態—」『名古屋大学教育学部紀要』一卷、一九五五、七四—八六頁。
- (14) 溝口ミツ「排便、排尿のシツケに関する研究(その一)」『大分大学学芸学部紀要』第七号(人文科学)、一九五八、七七一—八三頁。

なお同じ著者によって福岡市で九九〇人について行われた調査結果は、次に収録されている。

「トイレット・トレーニングの基礎的調査」『大分大学学芸学部紀要(自然科学)』第三号、一九五四、四八—五三頁。

第三節 運動制限の問題

乳幼児に対する運動制限がそのパーソナリティに及ぼす影響については、特に北米インディアンの間に広く分布する一種のユリカゴのもたらす心理的影響の問題をめぐる、更にスラヴ系諸民族の間におけるいわゆる“swad-

ding” (乳児を布に包んでおくこと) の風習が国民性の上にもたらす問題をめぐって、心理学者、そして殊に人類学者の間で屢々論ぜられてきた。

先ず、さきにも触れた心理学者の Erikson は北米インディアン中のスー (Sioux) 族について調査を行ない、乳児をユリカゴにかたく縛りつけておくことでの風習が乳児に著るしいフラストレーションを起し、この部族の攻撃的な性格を形成して行く上の重要な要因となっていることを強調している。⁽¹⁾ しかし Honigmann の指摘するように、このような仮説は上記のスー族やその他の平原インディアンにはあてはまるとしても、同じくユリカゴを使用して居ながらそれでいて攻撃性の極めて少ない穏和なホピー族その他のプエブロ・インディアンには全くあてはまらないことにも注意せねばなるまい。⁽²⁾ また、Kluckhohn は同じく北米インディアンの一種族たるナヴァホ族について詳しく分析を行ない、ユリカゴに緊縛されていることは甚だしい「無力感」を乳児に体験させ、怒、飢、苦痛等の内部感覚に対する反応を制限するが、このようなことよって起るフラストレーションは反覆されれば反って消失してしまうであろうから、その影響はたいして大きくはなからうと結論している。⁽³⁾ 同様に Benedict, Gorer, Mead 等は、スラヴ民族において権威に対して従順な態度の存在する原因を子供の時から swaddling の風習を受け無力感を抱いていることよって説明しようとしているが、⁽⁴⁾ これ又前節で述べた「排泄訓練から日本人国民性を論ずる行き方」と同じく甚だ危険であるとして多くの非難を浴びるに到っている。つまり、これらの説も単なる仮説の域を脱してはいないのであり、結局これら二つの場合についても「運動制限」の事実それ自体は余り問題にならず、むしろその際における母子間の愛情の通路が重視されねばならぬことが指摘

されるようになってきたことは上記の哺乳、排泄の場合と同様である。

日本の場合にこの運動制限が問題になってくるのは本稿第二部で扱うエジコの心理的影響について考える際であるが、⁽⁵⁾エジコ使用の基本型は各地で差異はあるがフトンで乳児をくるみ、縛っておくものであり、家内中が農耕（或は林業、漁業）作業に出たあと育児の役に当る人が誰もいなくなるため、上記のように乳児を縛って動けなくしたままこのエジコの中へ入れて朝から夕刻まで放置しておくのである。昼間の哺乳は朝、昼食時、夕刻に限られている。こうして昼間は乳児は只一人家の中に放置された儘になっており、いくら泣いても助けにくる人は誰も居ないのでそのまま泣き疲れてグッタリしてしまい、又顔の上に乳の香を慕ってハエが真黒にたかっても子供は手足の自由を奪われたまま追いやることも出来なくなっていることが屢々報ぜられている。更には乳の香にひかれた猫が子供の顔の上に上りこみ窒息させたとか、子供の耳を食いちぎったとかいうような、悲惨な出来事も少なくない。このような状態は現在では一部の地方を除いては急速に消え去りつつあり、従ってエジコのもたらす心理的影響も大きく変化しつつあると思われるが、何れにせよここで注意せねばならないのは、北米インディアンの場合はたとえユリカゴ内に縛りつけられてはいても、常に母親によって携行され、母親が戸外で作業中は、すぐ傍の樹などにたてかけられて置かれ、常に母親との親近感は失われていないのに対し、エジコにあっては昼間は只独りで家の中に放置されてしまうのであり（気候温暖な地方では畑仕事の際母親により携行されてあぜ道に置かれることがあるが、家の中に置残するのがむしろ一般的である）、先に述べたように運動制限という点よりむしろ母子間の愛情関係、親近関係の方を考えたとしてもエジコの影響は大きいと思われる。従ってわれ

われはエシコ使用の問題を調査するに当たっても、出来るだけその際に於ける母親の態度を中心に分析しようとしているがこの種の問題は面接調査によって把握するのが至難で、十分な分析をするにはいろいろな工夫を加える必要を痛感している。

(註)

- (一) Erikson, E. H. "Observations on Sioux Education", *Journal of Psychology* 7, 1939 (pp. 101~156).
do. *Childhood and Society*, 1956 (pp. 120~121). (草野栄三良訳『幼年期と社会・前篇(性と文化の錯綜)』一八九一~一九〇頁)
- (二) Honigmann, J. J. *Culture and Personality*, 1954 (p. 242). 坂本 登 & Dennis, M. G. "The Effect of Cradling Practices upon the onset of Walking in Hopi Children", *Journal of Genetic Psychology* 56, 1940 (pp. 77~86).
- (三) Leighton, D. & Kluckhohn, C. *Children of the People: The Navaho Individual and His Personality*, 1948 (pp. 18, 24~5).
- (四) Benedict, R. "Child Rearing in Certain European Countries", *American Journal of Orthopsychiatry* 16, 1949.
Gorer, G. "Some Aspects of the Psychology of the People of Great Russia", *The American Slavic and East European Review* 7, 1949.
Gorer, G. & Rickmann, J. *The People of Great Russia*, 1949.
Mead, M. "The Swaddling Hypothesis: Its Reception", *American Anthropologist* 56, 1954.
- (五) エシコについて
祖父江・須江・村上泰治「エシコに関する文化人類学的研究——分布及地域的変異について」『人類学雑誌』六六卷

第四節 身体的接触・保護

前節に最も重要な因子として母子間の心理的通路の問題があることを強調したが、この通路を更に一層強めるのは母と子の身体的接触である。具体的に言えば、この接触は母が子を抱く、背負うという事によって保たれるのであり、特に欧米には見られぬ日本独特の（もちろん未開社会各地に散在はしているが）背負う因習はこの接触の機会を著るしく増すものであり、更に人工授乳が一般的なものとなりつつある欧米とは異なって、日本では哺乳自体が接触の機会を与えることとなっている。このように母子間の身体的接触という事実はわが国ではむしろ余りに普通のこととなってしまっているため問題にされていなかったのであるが、従来極めて規則正しい合理的な育児法を提唱して実施しそのため母子間の身体的接触の機会が殆んどなかった欧米ではこの接触なる事実が育児に於て極めて必要な役割を演ずることを最近になってあらためて認識するようになり、特に「皮膚関係」(skinsnip)なる用語さえ用いられて（小児科医や）児童心理学者の間で盛んに論じられるようになってきた。⁽¹⁾

たしかに、皮膚関係は母子間の心理的關係を形成する上にも適量の保たれることが望ましいが、しかし、過度の愛撫、抱きぐせなどは乳児を依存的にしてしまうことが容易に推測出来るのであり或はこの面にも日本人の国民性の一面の形成原因を求めることが出来るかと思われるが、今後の cross-cultural な研究（特に日本と欧米の

比較研究など)が必要であろう。

尚身体的接触、皮膚関係というとき看過することのできないのは添え乳、添え寝の問題である。わが国に於ては母親とひとつ床で寝る乳児が甚だ多いわけであり、この点欧米に於ける場合とは根本的に異なってくる。例えば一九四八年の調査によると、⁽²⁾農村では「独りで眠らない乳児」が九四・一%に達している(都会では五三・六%)⁽³⁾前述の石黒・旭の研究では、母親が二年以上添寝した幼児群と、全く添寝をしなかったグループとを比べると、後者の方が情緒安定度が高くまた積極性が高いという傾向が見られたが、今後のインテンシヴな調査研究が望まれる。

(註)

- (1) 平井信義「WHO 主催児童の衛生に関する討議会に出席して」『臨床内科小児科』九巻四号 二四八頁。および、平井信義「日本のしつけ、欧米のしつけ」『教育心理』六巻九号、日本文化科学社、一九五八、六四頁。
- (2) 牛島義友『農村児童の心理』一二四頁
- (3) 石黒大義・旭妙子「乳幼児期の育て方と人格形成」『児童心理と精神衛生』第四巻第五号、一九五四、六一一四頁。

第二章 育児様式の諸相 (2)

——社会化の過程をめぐって——

第一節 社会化 (Socialization) の手段としてのコミュニケーション

一定の社会に生れた個人はその社会の成員として、その社会の価値規準行動様式を継承してゆく。これを社会化 (socialization) または文化化 (enculturation) ⁽¹⁾ という。杉浦健一 (一九五一) は社会化を「動物でもヒトでも個体が、その集団の成員として、社会に順応すること」とし「文化をつくる能力をもつヒト」の場合には、社会化が文化化 (culturalization) または enculturation と平行する」と定義した。

社会化の過程は個人の生理的および心理的成熟の過程と相互に影響しあって、個人のパーソナリティを形成してゆく。Gesell & Ilg (1943) ⁽²⁾ は個人の生長段階において、成熟の過程のほうが、より基本的なものであり、文化への同化が生理的および心理的成熟を超越することはありえないという。Kluckhohn & Murray (1956) ⁽³⁾ はパーソナリティ形成の決定因として、(1) 体質 (constitutional)、(2) 集団帰属 (group-membership)、役割 (role)、(4) 文化的に決定されない偶然 (situational) 及び以上の四つの相互作用を挙げて論じているが、本章に論ずる社会化の過程そのものも、社会の成員の体質、集団帰属、役割や、さらに文化的に決定されない偶然等によって支配されると考えられる。

個人はまず家族の中に生れる。各種の社会集団の単位となる国際的集団、国家、地域社会、階層、階級の中で、個人のパーソナリティ形成の初期の基本的な「場」を与えるものは家族であり、家族と乳幼児との人間関係を通じての相互行為 (interaction) によって、パーソナリティが形成される。したがって、パーソナリティ形成には、乳幼児をとりまく環境とのコミュニケーション ⁽⁴⁾ がその手段とされる。コミュニケーションとしては、「まず言語が考えられるが、そのほか動作、シンボリックな行為、シンボルの作用などによっても意味的コミュニケーション

が行われ」、乳幼児は「これらによって価値規準や、行動様式を習得する。⁽⁵⁾」

「生れた当座の人間は、他の哺乳類の仔のように間もなく立ち上って歩き出したり、母親とコミュニケーションの手段（人間では言語）を使うことは出来ない⁽⁶⁾」。ヒトの場合、特に言語によるコミュニケーションは満一才前後の一語文の時期に至って、ようやく可能になる⁽⁷⁾。

「言語を学習し、コミュニケーションが円滑になることは、他我を認知することを促進し、したがって自我の認識を分化させてゆくことになる⁽⁸⁾」。すなわち「他人の中に自己を見ることが、他人の反応を予見して期待すること、他人の立場に自己をおくこと（他の役割を演ずること）⁽⁹⁾」が可能となる。

コミュニケーションによる価値基準や行動様式の習練は主として言語によるものであるが、前に引用したように、そのほかの動作、シンボリックな行為、シンボルの作用などによっても行われる。乳幼児の社会化の過程において、どのコミュニケーションの手段が、どのように用いられるかには文化的差異があると思われる。

Kluckhohn & Leighton (1947)⁽¹⁰⁾によれば、ナバホ・インディアンは、子供たちに火や刃物が危険であるということをおもひ言葉で注意しない。子供たちは、転んだり、触れたりして身をもってその危険を知るようになる。これに対して白人は、火や刃物に触れるとどんな結果になるかを言葉で想像にうったえて大袈裟に教えるので、時に恐怖心の強い依存的な子供が出来るが、ナバホ・インディアンの子供は、少くとも外界から身の危険をうまく守るという点ではより自立的である。

R. Benedict (1946)⁽¹¹⁾は、日本において、育児 (child-rearing) の手段として言語による指導訓戒や、からか

いのほかに、坐り方や、書道を教える際、教え手が、自分の手で子供の身体を持って、その動作をさせてみることに力点がおかれることを指摘している。またシンボリックな行為と、シンボルの作用による訓育の例としては、子供をとがめる時に、手をふりあげて見せるとか、「お巡りさんがくるよ」といっておどすこと、はめる際、菓子を与えること等も含まれると考えられる。

更にコミュニケーションの手段の中心をなす言語の発達そのものも、社会的、文化的条件によって影響⁽¹²⁾され、特に、マスコミュニケーションのあまり浸透していない農村ではまず子供は方言を覚え、学令期に標準語を学ぶという点で、都市の子供と比較して、パーソナリティ形成に問題がある。また幼児期に常に母親や年長者が側について居り、一間の小屋 (hogan) に住んで大人の生活を見ているナバホ・インディアンの子供と、暗いネマにひとりエジコに入って放置されている子供の間には言語の発達に差があると考えられる。

(註)

- (1) 杉浦健一『人類学』一九五二、同文館、三二四頁。
- (2) Gesell, A. & Ilg, F. L.: *Infant Care and Child in the Culture of Today*, 1943, Harper & Brothers, New York. 依田新・岡宏子訳『乳幼児と現代の文化』一九五四、新教育協会。
- (3) Kluckhohn, C. & H. A. Murray: "Personality Formation: The Determinants", (in) C. Kluckhohn & H. A. Murray & D. M. Schneider (eds.): *Personality in Nature, Society, and Culture*, 1956, 2nd rev., Alfred A. Knopf, New York.
- (4) Newcomb, T. M.: *Social Psychology*, 1950, Dryden Press, New York.

森東吾・万成博訳『社会心理学』一九五六、培風館、二六八頁、「コミュニケーションの定義」を参照。

- (5) 佐々木徹郎・田野崎昭夫「パーソナリティの形成と変容」、福武直(編)、講座社会学、第一卷、『個人と社会』一九五八、東大出版。
- (6) 佐々木・田野崎、一九五八、既出。
- (7) 児童における言語の発達については、
園原太郎『精神発達』矢田部達郎(監修)、『改訂心理学初歩』一九五六、創元社、東京。
山下俊郎『改訂幼児心理学』一九五五、朝倉書店、東京。
南博『体系社会心理学』一九五六、光文社。
芳賀純「言語の発達」波多野完治ほか。現代教育心理学体系4。『人間における諸機能の発達』一九五八、中山書店。
矢田部達郎『児童の言語』一九四九、比叡書房。
柳田国男『分類児童語彙上巻』一九四九、東京堂。
- (8) 長島貞夫『児童社会心理学』一九五六、牧書店、七七頁。
- (9) 長島、既出。
- (10) Kluckhohn, C. & Leighton, D.: *Children of the People*, 1947, Harvard Univ. Cambridge.
- (11) R. Benedict: *The Crysanthemum and the Sward*, 1946, Houton Mifflin Co., Boston.
長谷川松治訳『菊と刀』一九五二、現代教養文庫。
- (12) 言語発達を規定する生理的・心理的条件および社会的文化的条件については、
矢田部、一九四九、既出。

第二節 社会化の場としての家庭

社会学の研究が⁽¹⁾明らかにしているように、家庭は個人のパーソナリティ形成の基本的な場であり、社会の価値体系や行動様式の伝達に重要な機能を果している。

個人の社会化の過程を通じて伝えられる価値体系や行動様式は次の二つに分けて考えられる。⁽²⁾

(1) 「ある社会の成人のすべてが、一応参与して守らなければならない、ないしは守っているのが普通である価値体系や、行動様式⁽³⁾——Linton (1936) のいう universals——、たとえば日本人であれば日本語を話し、着物や洋服を着用し、日本式居住様式をもち、日本の法律や道徳にしたがうことなど」。これは家庭のしつけ以外にも普通教育制度によって教えられる。

(2) 「社会は分化した構造と機能をもち、各メンバーの地位 (status) およびその果す役割は各種のものに分化しているが、同じ地位にある人々に共通に要求される行動様式——Linton (1936) のいう specialities——、たとえば、男は男らしく、長男は長男として、農家の母親は母親としての地位に応じて異った役割が期待される。個人の一生を通じて様々な役割期待、および役割行動の学習および獲得が行われる。

それらがどんな順序で個人の一生のどの時期に現われ、どの程度永続するかによって、個人のパーソナリティの構造の内容を決定する要因となる。⁽⁵⁾

本節では特に家庭におけるソシアライゼーションと子供の性別、年令別出生順位別および家族構成による役割期待との関係についてのべ、今後の研究の一指針としたい。

乳幼児のしつけや訓育の主な担当者は家族の中でも女、特に母親である場合が多いが他の家族構成員がどの程

度しつけや訓育に関与するか、その社会の文化および社会構造が育児担当者にどのような役割期待を与えているかによって育児様式が変化する。日本の家族構成⁽⁶⁾には地域的差があるが、農村に於ては都市に比較して家族構成員数が多く、乳幼児の祖父母を含む場合が多い。老人の子供の養育への関与のしかたは日本の育児様式における一つの問題であろう。

社会化の過程は、乳幼児に対する役割の期待によっても左右される⁽⁷⁾。アメリカの文化人類学者たちは、日本人の乳幼児は非常に甘やかされることに気付き、R. Benedict (1946)⁽⁹⁾も「日本人の生活曲線は、大きい底の浅いU字曲線であって、赤ん坊と老人とに最大の自由と我儘が与えられる。……しかしながら、アメリカ人も日本人も共に、その生活曲線を以上のように定めることによって、事実上各々の国において、個人が壮年期に思う存分活動して、自己の文化に参加する途を確保して来た。」ことを指摘した。この点はJ. Embreeが行ったように、通過儀礼と、社会的役割期待の変化を対応させて検討する必要がある。これに対して、B. B. Lanham (1956)⁽¹⁰⁾は和歌山県海南市の調査にもとづき日本の育児様式には家庭により大きな差異がみられるが、規律正しさ、清潔、行儀作法がアメリカ人の子供より早く強調され、特に遊び友達とのつき合い方が早くしつけられることに興味をもつてのべている。ただし、この論文の結論は小学生の母親に対するアンケートを基礎にしているので、現実の育児様式より、母親の理想とする育児様式にある程度偏っていると考えられる。

家庭においては、乳幼児の男女別、年令、兄弟姉妹の関係及び家族構成に基いて役割期待が異なり、その役割行動習得のための育児様式は、同一社会内でも家庭の属する階級、階層⁽¹¹⁾により、家族員の職業、教育程度およびパ

パーソナリティによって差異がみられる。

男女別、年令別の役割期待は成長に従って髪のかたち、衣服、宮まいり、節句などの儀礼のちがいにによって表現され、身のまわりの始末、行儀、言葉づかい、従順さ、家事の手伝、年中行事への参加、学業成績、農村では農業労働への参加に関する訓育においても差異を示す⁽¹²⁾。日本では、学令期に入った女兒に対する訓育は男児に比して厳しいと考えられている。Parsons (1942)⁽¹³⁾ がアメリカ社会に関してのべているように、父母とも一日中家族の中で働くものが多い農村の男児および女子が昼間出勤する父親をもつ都市の子供と比較して、役割の学習およびパーソナリティ形成の過程にどういふ差異を示すかは日本においても注目すべき問題である。日本のエジコ使用地域で、エジコに男女を区別する印をつけるということを未だ聞かないが、ナバホ・インディアンはユリカ⁽¹⁴⁾ゴの装飾として男の子にはトルコ石やビーズ玉を、女の子には白い貝殻をつけ、過去には、材木や形までも区別して作っていた。

年令による役割期待は個人の暦年令による他に、兄弟姉妹関係の中における相対的位置によっても異なる。兄弟姉妹関係は、兄弟姉妹の数、出生順位、年令差、男女別構成⁽¹⁵⁾によって決定される。我が国では長子の出産によって母親の婚家における地位が確立する事が多く、特に長男は家系と職業と住所を継承するものと期待される。これに対して二三男および女子は、ゆくゆくは家を出てゆくものと考えられ家長権を長男に認めざるを得ないよう教育される⁽¹⁶⁾。Granquist (1955)⁽¹⁷⁾ の調査したパレスチナのアラブのインフォーマントは、男子の出生が歓迎されるといっている。アラブの社会では、父系制で女子は結婚して家を出てゆくものであり、また結婚後も厄介な問

題を実家にもってくると考えられてあまり歓迎されない。しかも夫の死後、妻が婚家にとどまって安定を得ることを保障するのはその息子たちであり、男子の出生は母親の地位の確立を示すものとして重要である。子の出生によって親の社会的地位が確立する事実は多くの調査者によって報告されており、普遍的な現象ではないかと思われるが、男女どちらがより望まれるかについては慎重な考察を必要とする。Spicer, Chesky & (1949)⁽¹⁸⁾によると、日本やアラブと同様に父系制をとっているアリゾナのパパゴインディアンでは特にどちらを強く望むというのではない。これは成人の男女の経済的分業その他の役割分化との関連に於て検討されるべきであらう。

長子は下の子の出生によって兄又は姉としての役割を期待される。下の子の出生によって生ずる欲求不満の度合、それに対処する方法は文化により異なるが、⁽¹⁹⁾日本では次子の誕生によって離乳が行われ、祖父母が長子の育児の主導権をもつに至る場合があり、いわゆる「おばあさん子」の問題として心理学者による研究が行われている。⁽²⁰⁾

この点岡山県高島の調査を行った Norbeck (1956)、および熊本県須恵村の調査を行った J. Embree (1938) などの文化人類学者によっても報告されている。

パーソナリティ形成の上で一般に問題となるのは、姉、兄が弟妹より、より依存的でないことが要求され、自分の身のまわりの始末のほか、家事手伝、年令によっては弟妹の世話などを行わなければならない、それによって訓練されて、兄弟間に性格差を生ずるといふ点である。⁽²²⁾ 更に Whiting⁽²³⁾ (1941) がニューギニアのクワオマ族について述べているように、成人して後の対人関係の型が、幼少時の兄弟姉妹関係の中で作られてゆくという問題もある。即ち、弱者に対して攻撃的なクワオマの態度は、弟妹に対する攻撃を奨励されることによって形成されて

ゆくのである。

幼少期のソシアリゼーションはほとんど家族において行われるが、家族以外には近隣、及び遊び仲間がある。遊び仲間との交際は家族外の社会に入ってゆく準備段階として重要であり、J. Honigman (1954)⁽²⁴⁾ は、R. Benedict (1946) の「菊と刀」を引用して、遊び仲間の嘲笑が世間の批判・嘲笑に対する日本人の恐怖を培う上に大きな役割を果すといっている。

日本の子供の遊び、制度化された子供組などについての研究は、民俗学者によって行われ、社会組織としての子供組は竹内利美⁽²⁵⁾によって研究されて来ている。

(註)

(一) Parsons, T. & Bales, R. F.: *Family: Socialization and Interaction Process*, 1956, Routledge and Kegan Paul, London.

(二) 佐々木・田野崎(一九五八、既出)は個人の社会化の課題とされ、パーソナリティを形づくる内容として、この二つの他に、Linton (1936, pp. 273—274 註(3) 参照)のいう alternatives および individual peculiarities を各人任意にとりうる行動様式としてとりあげている。「これは社会化の課題として義務づけられるものではなく、むしろ社会化のうちにおのおのずからなる結果としてもたらされる」(二一九—二三〇頁)ものであり、また本節でとりあつかう幼少年期にはあまり重要でないので省略する。

(3) Linton R.: *The Study of Man*, 1936, Appleton-Century-Crofts. New York, p. 272.

(4) Linton: 1936, op. cit., p. 272.
地位および役割については

Linton, R.: *The Cultural Background of Personality*, 1945, Appleton-Century-Crofts. New York.

育児様式とパーソナリティ

- 清水幾太郎ほか訳『文化人類学入門』一九五二、創元社。
 Newcomb, T. M. 1950, *op. cit.*
 南博 一九五七 既出。
- 横山定雄「パーソナリティと社会生活」福武直（編）講座社会学、第一卷、『個人と社会』一九五八、東大出版会。
- (5) Murray, H. A. "Toward a Classification of Interactions", (in) Parsons, T. & Shils, E. A. (eds): *Toward a General Theory of Action*, 1952, Harvard Univ., Cambridge, pp. 436-440.
 祖父江孝男「パースナリティの構造について」一九五四、『人類学雑誌』第六三卷五号
- (6) 戸田貞三『家族構成』一九三七、弘文堂。
 森岡清美「家族の構造と機能」福武直（編）講座社会学、第四卷、一九五二、東大出版会。
 泉靖一・蒲生正男「日本社会の地域性」佐藤弘・渡辺操（編）日本地理新大系、第二卷、一九五二、河出書房。
 蒲生正男『社会学講義資料Ⅲ』一九五六、敬文堂。
- (7) Benedict, R. F.: "Continuities and Discontinuities in Cultural Conditioning", 1938, *Psychiatry*, Vol. 1.
- (8) Embree, J. F.: *Suye Mura; A Japanese Village*, 1939, Black Star, New York.
 植村元覚訳『日本の村落社会』一九五五、関書院。
- Gorer, G.: "Themes in Japanese Culture," 1943. (in) D. G. Haring (ed) *Personal Character and Cultural Milieu*, 1948, rev. ed., Syracuse Univ.
- Norbeck, E. and M.: "Child-training in a Japanese Fishing Community", 1956, (in) D. G. Haring (ed.): *Personal Character and Cultural Milieu*, 2nd rev., 1956, Syracuse Univ.
- (9) Benedict, R. F., 1946, *op. cit.*
- (9) Lanham, B. B.: "Aspects of Child Care in Japan: Preliminary Report", 1956. (in) Haring, D. G. (ed.), *op. cit.*
- (11) アメリカにおいては、育児様式の階層、階級差に関する社会学者の研究が多い。調査内容については第三節を参照せよ

をたす。

Davis, A.: "American Status System and the Socialization of the Child", 1941, *Amer. Sociol. Rev.*, Vol. 6, pp. 345-54.

Davis, A. and Havighurst, R. J.: "Social Class and Color Differences in Child-rearing", 1946, *Amer. Sociol. Rev.*, Vol. 11, pp. 698-710.

Ericson, M. C.: "Child Rearing and Social Status", 1946, *Amer. Jour. of Sociol.*, Vol. 52, pp. 190-2.

Havighurst, R. and Davia, A.: "A Comparison of the Chicago and Harvard Studies of Social Class Differences in Child Rearing", 1955, *Amer. Sociol. Rev.*, 20, pp. 438-446.

Littman, R. A., Moore, R. C. A. & Pierce, J. J.: "Social Class Differences in Child Rearing: A Third Community for Comparison with Chicago and Newton", 1957, *Amer. Sociol. Rev.*, Vol. 22, pp. 694-704.

White, M. S.: "Social Class Differences in Child Rearing Practices, and Child Behavior", 1957, *Amer. Sociol. Rev.*, Vol. 22, pp. 704-712.

(21) 一般的社会学の形を記述するトクソン

* Benedict, R. F., 1946, op. cit.

* Gorer, G., 1943, op. cit.

Haring, D. G.: "Aspects of Personal Character in Japan", 1946, (in) D. G. Haring (ed.), 1956, op. cit.

Haring, D. G.: "Japanese National Character: Cultural Anthropology, Psychoanalysis, and History", (in) D. G. Haring (ed.), 1956, op. cit.

* LaBarre, W.: "Some observations on Character Structure in the Orient: the Japanese", 1945, *Psychiatry*, Vol. 8, pp. 319-342.

Lanham, B. B., 1956, op. cit.

Norbeck, E. and M., 1956, op. cit.

* Sikkema, M.: "Observations on Japanese Early Child Training", 1947, *Psychiatry*, Vol. 10, pp. 423-432.

* は米国の日系二世に関する調査を基礎にしたもの
通過儀礼については

祖父江孝男「日本に於ける乳幼児期諸儀礼の総合的研究」(第十三回、日本人類学会・日本民族学協会連合大会、一九五八)

お手伝・農業労働への参加に関しては

牛島義友『農村児童の心理』一九四六 巖松堂。

- (13) Parsons, T.: "Age and Sex in the Social Structure of the United States", 1942, *Amer. Sociol. Rev.*, Vol. 7, pp. 604-616.
- (14) Kluckhohn, C. & Leighton, D. 1942. op. cit. pp. 19-20.
- (15) 辻正三「兄弟(姉妹)関係・一人子・養子その他」津留宏ほか著『親子関係』一九五四、福村書店。
塩田芳久「きょうだい関係」依田新編『家族の心理』一九五八、培風館。
Honigman, J., 1954, op. cit., p. 301.
- (16) 大牟羅良「ものいわぬ農民」一九五三、岩波新書。
福武直「家族における封建遺制」日本人文化学会編、既出一九五二、一五三頁。
- (17) Grandwist, H.: *Child Problems among the Arabs*, 1950. EKNÄS Tryckeri Aktibolag, pp. 138-144.
- (18) Spicer, R. B. & Chesky, J. et. al.: *The Desert People*, 1949. Univ. of Chicago Press, Chicago, p. 56, p. 117.
- (19) Eggan, D.: "The General Problem of Hopi Adjustment", 1943, *Amer. Anthro.*, vol. 45, pp. 357-373. Kluckhohn, C. and Leighton, D.: op. cit.
- (20) 「おぼめさん子」については第四節註(32)を参照されたい。
- (21) Child, J.: "Socialization", (in) Lindzey (ed.) *Handbook of Social Psychology*, 1954, pp. 655-692.

(22) 兄弟姉妹間の性格差については

三木安正・天羽幸子「兄的性格、弟的性格と双生児における兄弟的取扱いについて」一九五六『東京大学教育学部紀要』第一巻

杉溪一言・石井哲夫「幼児期におけるまよふ関係の実験的研究」『心理学研究』、第二六巻四号、一九五六などの心理学的研究がある。

(23) Whiting, J. W. M.: *Becoming a Kwoma*, 1941. Yale Univ., New Haven, pp. 57-59.

(24) Honigman, J., 1954, op. cit., pp. 302-303.

(25) 竹内利美「子供組について」民族学研究第二二巻 四号、一九五八。

第三節 賞罰（制裁）の諸様式

人類学者として、育児様式を「隠れた文化」(covert culture)理解の鍵の一つとして、認めている Kluckhohn C. (1943)⁽¹⁾は、文化の様式を、行動様式 (behavioral pattern)、および理想様式 (ideal pattern) または制裁様式 (sanctioned pattern) の二つに分類しているが、乳幼児が成長の途上において、社会の規範に合致した行動様式を習得するさいに、その社会のもっている賞罰（制裁）の様式 (pattern of discipline, pattern of sanction) が大きな役割をもっていることは否定できない。基本的な生活習慣の習得に当って、最初のうち生理的欲求を満足させる上に賞罰あるいは制裁は、ほとんど関与しないけれども、離乳とか、排泄、清潔等の習慣が、次第に内面化され、幼児の自発的な行動の量と範囲が大きくなるにつれて、家庭内では、望ましい行動に対しては、承認、激励、賞讃が、望ましくない行動に対しては、制約、拘束、罰が与えられることになる。これは、こ

どもが自身で、社会の規範に従って行動できるようになるまで、つまり完全に社会化するまで続く過程であり、家庭においてだけでなく、友人関係、学校においても、こどもの行動に通路を導く手段である。

この賞罰（制裁）の様式が、文化によって集団によって、また社会階級や家庭によって異った様相を示し、そこに、異ったパーソナリティを形成する原因のあることは、既に指摘されているところである。Sears, R. R., Maccoby, E. E., Levin, H. (1957)⁽²⁾ は、育児過程における二側面として、「何が教えられるか」——実質的側面と、「いかに教えられるか」——方法的側面をあげ、こどもの自己統制の発達については、賞罰の諸様式の質が重要な問題であるとのべている。

また、育児様式と社会階級の関係について詳細な研究を行った Davis, A. Havighurst, R. J., (1946, 1955)⁽³⁾ ⁽⁴⁾ & Maccoby, E. E., Gibbs, P. K., & (1954)⁽⁵⁾ また Littman, R. A., Moore, R. C. A., Pierce-Jones, J. (1957)⁽⁶⁾ の報告では、賞罰の方法が、哺乳及離乳、排泄、家庭での手伝や行儀、依存性・攻撃性等の訓練の項目とともに、育児様式または、「行動のシステム」“systems of behavior”を構成するものとしてとり上げられている。

賞罰の様式について、次の三点が研究者の関心となるであろう。

- 1、賞罰の方法と種類
- 2、民族、社会階級、職業等のちがいによる賞罰様式の差異
- 3、賞罰の様式の差異とこども（あるいは、成人）のパーソナリティ特性との関係

右の1についての従来の研究では、教育心理学における学習・指導の問題に関連したものをあげることができ
る。堀内敏夫(一九五一)は、

(1) 本人に直接与えられる方法⁽⁷⁾

(イ) 言語表現によるもの(賞讃、叱責等)

(ロ) 身体的刺激を与えるもの(愛撫、握手、体罰等)

(ハ) 物質を媒介とするもの(ほうび、与えたものをとり返す等他)

(2) 人に報告する方法(主として学童の場合)

(イ) グループや学級の前で与える

(ロ) 学校の全生徒の前で与える

(ハ) 家庭に通報する

(ニ) 地域社会に通報する

等を指摘している。また、辰見敏夫(一九五一)⁽⁸⁾は、(1)体罰、(2)隔離、(3)自然の結果にまかせる、(4)おどかし
(5)ほうび、(6)告白等をあげている。Litman, R.A.らの前記報告には⁽⁹⁾、(1)ほうび、または賞讃、(2)理由づけ、
(3)叱責またはおどかし、(4)特権のハク奪、(5)食事の禁止、(6)隔離、(7)起立または坐臥、(8)平手うち、(9)無視また
は拒否等が賞罰の方法として記されている。前記 Sears, R.R.ら⁽¹⁰⁾は、まず、賞罰には、いくつかの次元のある
こと、即ち、(1)現在の状況に対する行為の統制 対 将来に備える行為の学習、(2)子供の側の行為の理由 対

親の期待する行為の内容、(3)是認的、許容的統制 対 否認的、禁止的統制、(4)愛情中心 対 物中心ものの四つの次元を指摘したのち、

A、是認的、許容的なものとしては、

a、賞讃——承認、愛情等の象徴的報酬

b、具体的報酬——金や飴等 をあげ、

B、否認的、禁止的なものとして、

a、体 罰

b、特権のハク奪

c、愛情の撤回

d、隔 離 さらに加えて、

C、行動の指示 として

a、模範を示す(よい模範、悪い模範を他の兄弟、家族、友達等について)

b、理由づけ 等を列挙し、さいごに

D、首尾一貫性 を、細かな賞罰の方法それ自体よりも重要なものとしてとりあげ、養育者が賞罰の方法について一貫した行動をとることが、こどもに安定した予見可能な行動をとらせることになるとのべている。

2の、民族・集団のちがいによる賞罰の様式の差異については、多くの文化人類学者や社会学者の研究がある。

これらにあって賞罰の様式は次の五つの視点から眺められている（どの研究もこれらの視点をすべて網羅しているというわけではないが）。

- (1) 賞罰の方法と種類 ((techniques and means of discipline)
- (2) その各々の用いられる量と頻度 (frequency and degree of discipline)
- (3) 時と場所 (time and situation of discipline)
- (4) 賞罰のにない手 (agents of discipline)
- (5) 賞罰が目標としている、理想的な子どものイメージ (ideal pattern of children's behavior as a goal of discipline)

Mead, M. (1932)⁽¹¹⁾ は、ニューギニアのアラペシ族において子どもを不当に罰することが皆無であることもやみに罰しないことが、その社会の強い慣習であることを観察し、ムンドグモル族にあっては、親による叱責と強制が圧倒的に多いこと、自分の性と異なる子どもに対しては保護はするが、愛情とか暖かさを示すことはないし、同性の子どもは敵意の対象であることを指摘している。サモアの子どもは、自分の親にきびしく叱られることもなく、非常に愛されることもない。というのも、家族は一人の男子のリーダーによって統率される大世帯で、成人は誰でも子どもを保護し親代りをつとめているので、強い人格的つながりの上でなされる賞罰はない。また、アリゾナのホピインディアンの研究を行った Dennis, W. (1941)⁽¹²⁾ によれば、子どもの行動については、実父よりも母方の叔父にある程度の責任があり、子どもを罰するのは彼の役目で、いたずらがひどい時は、鞭を用いた

り、焚火にいぶすことも稀にあるという。

これに対して、昔から多くの社会では、両親が賞罰のにない手である。しかし、父親と母親のどちらがより多く罰を加えるかといえ、やはり、社会を異にするに従い、変化が見られる。Davis, A. と Havighurst, R. J.⁽¹³⁾ また Litman, R. A. らの⁽¹⁴⁾、米国はシカゴ、ボストン、ユージーン（オレゴン州）三市のそれぞれの中層下層階級についての比較研究では、シカゴ及ボストン双方のサンプルについて、階級に関係なく母親の方が、父親より多く子どもを罰し、ユージーンではほとんど差が見られず、ほとんどの家庭においても、父親のみを罰を与える役割と考えることに反対であった。しかし、実際に、どのようにその責任を分担しているかの調査はなされなかった。

成人のもっている理想的な子どものイメージや成人の価値体系によって賞罰の方法や程度が異なることは、未開社会の比較にまつまでもなく、同じ国民についても時代によって異った児童観や教育観があり、それに応じて成人の賞罰が変化してきていることによって明らかである。Newcomb (1950)⁽¹⁵⁾ は、植民地時代の米国人には、「鞭を惜しんで子どもを甘やかすな」"Spare the rod and spoil the Child" という、当時に特徴的な格言に示されるような様式があったのが、現在「典型的な」米国少年といえ、両親の一方または両方から、むしろ強い愛情を注がれ、清潔、作法、向上心等の点で、良心的なしつけをうけている形に変わっていることを指摘している。また、サモアの子どもの犯す最大の罪が「いかなる形式にせよ、「年齢不相応のふるまいをすること」であるのに対し、米国では、子供が「年に似合わぬあっぱれなこと」をするのを大いに誇りとする対照を記している。

前記の Litman らの報告では、社会階層の差異によって賞罰の方法がどのように違うかが調べられているが、シカゴの中層階級の母親たちが、もっとも効果ある方法として、ほうび、または賞讃をあげている一方、ボストンの中層階級の母親たちにとっては、愛情の撤回をほめかす叱責が第一であること、また下層階級では特権のハク奪や体罰が中層階級に比べて頻繁に行われていることが報告され、ユージンでは、階層間に差はないが、父親よりも母親の方が、隔離の方法を二倍前後用いていることを指摘している。長島（一九五六¹⁶）は、Davis, A. が “Children of Bondage” (1940) の中で行った中産階級の子どもの観察記録を引用しているが、そこには、家庭内では、母親の命令に服従しなかったとき父親が罰をあたえること、その場合、体罰はまれで、子どもを家に閉じこめたり、特権を奪ったり、おどかし等が用いられていることが見出される。その他、Anderson, J. E. (1936)¹⁷ は下層階級において叱責がより多く用いられること、職業群によって賞罰の方法に差のあることを報告している。

Benedict, Ruth は、「菊と刀」¹⁸の中で、米国と日本の育児様式を指摘し、「米国の母親が、乳児の手を叩いたり、しばしば姿を消したり、外出に際して子どもを家にのこしたりする」一方、日本の母親が、望ましくない行動をとる子どもに対して、往々、他の模範的な子どもに嘲笑されるべきことを告げたり、また愛情の停止や撤回をほめかす「からかい」を用いて、しつけを行っていることを記している。彼女は、さらに、こうした育児にみられる賞罰の様式が一般に成人の人間関係においても適用されている点に注目して、日本人の行動の統合原理として、「恥の文化」という概念を用いているが、このことは、ある国、ある集団で行われている賞罰の様式を

通してその国民性や集団成員の特質を考察する方法を例示したものと興味深い。

しかし、日本における実際の賞罰の様式に、どのようなものがあるかといえば、都市と農村、ことなつた社会階層、職業集団の間の差異についての実証的研究は、はなはだ少いものではあるまいか。塩川武雄は昭和二三年に行つた、地区別、年齢別、性別による「両親の叱責と子供の反応」の調査を一〇年後に再び実施して、叱責場面や、叱責方法、叱責反応のそれぞれについての時代的变化を見ているが、⁽¹⁹⁾叱責の型として、小言型が減り、注意型と説教型が若干増加、暴力的傾向が前回より増加していることを報告している。(他に、沈黙型、怒号型、監禁型、追放型等計一〇類型を用いている。)石黒大義は名古屋市を中心とした都市において、三才九ヶ月から六才八ヶ月の間にある幼児をもつた、一三二名の母親に乳幼児のしつけに関する面接調査を行つた際、幼児の(イ)家庭内の攻撃的行動、(ロ)家庭の秩序を無視する行動、(ハ)非衛生的行動、(ニ)社会的秩序を無視する行動、に対する母親の考え方と罰の方法について質問しているが、結果については、未だ詳しい報告が出ていない。僅かに排泄訓練中の子どもへの失敗に対する罰として、サラリーマン階層において中小企業者階層、労働者階層に比べて言語による叱責が体罰とほぼ等しい頻度であられる(他の階層では、おしりを叩く足などつねる体罰が甚だ多い)ことを見出している。⁽²⁰⁾

次に、賞罰の様式の差異と、子ども(あるいは成人の)パーソナリティ特性との関係であるが、辰見は、前にあげた親の用いる手段と児童の人格的特性(社会性・魅力性・現実性・自立性)との相関関係を表示し、「自然の結果にまかせる」方法が、他のどの方法よりも効果的であるとしている(相関係数は、四つの特性について、⁽²¹⁾

一九から、三七の範囲である。)

水原泰介、島袋弘子、藤田輝子ら(一九五五)⁽²²⁾は、家庭での子どもの扱い方と、子どものクラス内での人気について調査した際、賞罰の調査(叱責については、(1)痛い目にあわせる、(2)暗い所に入れる、(3)口で叱る、(4)子

水原、島袋、藤田による「家庭での罰の量とクラス内での人気」の関係

人 罰	人 気	人気が ない	人気が ある	計
多	い	50	34	84
少	い	25	50	75

$$\chi^2=11.41 (P<0.01)$$

供のすきな物をとりあげる、(5)家から外へ出す、(6)おどかすの六項目、賞については、(1)おやつを与える、(2)小遣いを与える、(3)かねて欲しいものを買ってやる、(4)口でほめる、(5)行きたいところへつれて行く、(6)やりたがっていることを許す、の六項目について、四段階法を用いた)を行い、家庭で賞または罰の多いものと少ないものについて、クラスでの人気の程度を見た。(ソシオメトリックテスト使用)、そして、賞と人気との間には、はっきりした関係を認めないが、罰の多い家庭の子どもは、罰の少ない家庭の子どもより人気がないという表のような結果を得た。

こうした心理学者の研究とちがって、文化人類学者や精神分析学者の報告には、もっと大胆に、賞罰がパーソナリティに及ぼす影響をのべているものがある。Mead, M.⁽²³⁾によれば、アラペッシュ族が、協同的で、平和的であり、ムンドグモル族が怒りっぽいのは、それぞれ既述のべたような、賞罰の様式の差異に起因するといひ、Du Bois, C. (Kardiner, 1945)⁽²⁴⁾は、アロア島民においては、食事に関する一般的フラストレーション、押しつけたり平手うちを食わせてなされる離乳等に加えて、子どもの発達に応じた技倆を学ばせることなく、嘲弄、脅しに

よる首尾一貫しない制裁様式が、成人のパーソナリティに、不信と不安の満ちた情緒性や、固執性のない、不安定で孤立した心性や、また爆発的で無分別な攻撃性を与えていると記している。

しかしながら、不安や疑い深さの強い成人のパーソナリティが、幼児期の制裁様式の結果あらわれるとするにはまた多くの反証がある。ブエブロインディアンにせよ、ナバホ族にせよ、その幼児は最大の保護を受け、なんらの統制をうけていないに拘らず、その成人は高い水準の不安と適応障害をもって特徴づけられている。ホピ族も、部族内部の問題では果てしない悶着と激しいゴシップが絶えず、互いに不信をかこっているが、一方、競争や肉体的攻撃を好まぬ傾向をもち、その排泄のしつけも厳しくなく食事のフラストレーションもない、子どもは母親以外の人からも、愛情を享受して、坐る膝を探すのに事欠かぬ程であるといわれる。

Eggen (1948)⁽²⁵⁾ は、このホピ族について、その不安や悶着にとらわれた現象を、基本的生活習慣の形成過程に起因すると見ず、乳幼児期以後の社会化の過程全般及び社会的背景との関連において説明した。現在中年に達したホピの成人は、白人勢力の支配下に成長し、家庭にあっては絶えず親から白人警官が来て白人の学校にやられなくなかったら」云々と脅され、結局、白人の学校に入れさせられてからは、インディアンの生活や価値を無視された授業に甘んじなければならなかった苦痛や、その学校と家庭生活の双方に適応しようとしたことが、不安を生む一つの要因であるとのべている。また、彼女は、ホピの子どもが幼少から、「カチーナ(面をつけた怪物)」「蜘蛛女」、「ふくろう」、「妖精」、また、飢饉や干ばつ等の怖い物を話の中に教えられたり聞いたりして、しばしば夢魔(夜驚)に襲われることの多いことを指摘している。更に彼女は、ホピ族の攻撃的衝動の処理のしかた

に注目して、幼児にあっては、自由に発散して効果をおさめた攻撃的行動も、子どもが、だんだん成人の社会に入り込むにつれて、無私・協力を尊しとする価値の前に、それを抑えることを学ばねばならず、かつまた、他に発散する方法（たとえば仕事やスポーツにおける競争）もなく、（前述のように競争は忌むべきこととされている）結局、機会さえあれば、言葉によるゲリラ戦術すなわちゴシップのみが残された手段になるのだと説明している。

この説明の当否は別として、Eggar の分析から学ぶことは、乳幼児期の基本的習慣をめぐる訓練よりも幼児期以後を含む社会化の全過程に、成人のパーソナリティ形成の鍵があるということである。長島が詳しく論じ、またわれわれも第一章でのべたように、成人の性格を決定づける要因として、乳幼児期の基本的生活習慣の訓練は決して過大視されてはならない。基本的生活習慣の後に来る社会的規範の習得の過程にも注目し、特に賞罰の様式が、子どもの幼児期、児童期、青年期を通じて行われる社会化の全過程にあってどのように相対的変化をとげるかを分析する必要があるであろう。

Eggar とともに、ホピの育児様式とパーソナリティを分析した Goldfrank (1949)⁽²⁶⁾ は、ホピまたは他の部族や集団を理解するのに、次のような四つの社会の型に見られるディスコンティニユイティ (discontinuity) に注意することを提案している。それらは、

- (1) 乳児期及び後の賞罰（制裁）様式の非常に弱い社会
- (2) 乳児期及び後の賞罰（制裁）様式の非常に厳しい社会

(3) 乳児期に厳しく、後に弱まる社会

(4) 乳児期に弱く、後に厳しくなる社会

である。ホピについては、どの研究者も、彼らの社会が(4)に属することを認めている。すなわち、哺乳、排泄のしつけ、罰及び性的行動のすべてについて乳幼児期に寛容であるにかかわらず、社会化が進むにつれて、子どもは、その行動にいろいろな制約と監視をうけることになるのである。

Goldfrank は、ホピの社会にあっては、社会化が、乳幼児期のしつけにより、ごく一部分的影響しかうけていないこと、それはむしろ、子どもが、成人式 (Initiation ceremonies) によって部族の仲間入りをする六—一〇歳より後の、長い時間的経過の中に成立することを明らかにしている。乳幼児期から児童期への推移に注目する必要を強調しているのである。

Benedict, R. (1946) は、「菊と刀」の中で次のようにのべている。⁽²⁷⁾

「日本の生活曲線は、アメリカの生活曲線の丁度逆になっている。それは大きな底の浅いU字型曲線であって、赤ん坊と老人とに最大の自由と我儘とが許されている。幼児期をすぎるとともに徐々に拘束が増して行き、丁度結婚前後の時期に、自分のしたい放題のことをなし得る自由は最低線に達する。……

米国では、幼児には厳しいしつけが加えられるが、これは子供が体力を増してゆくにしたがって次第にゆるめられてゆき、いよいよ自活するに足る仕事を得、世帯をもって、立派に自力で生活を営む年頃に達すると、ほとんど全く他人の制肘をうけないようになる。われわれの場合には、壮年期が自由と自発性の頂点になっており、

年をとってモウロクしたり、他人の厄介者になるとともに再び拘束が姿を現わし始める」と。

高木正孝（一九五四）⁽²⁸⁾は、右の文章を引用した後、さらに例をあげて、日本の乳幼児期における「子どもの自由」と、それが成長に伴っていかに制約されてゆくかを詳しくのべている。また、彼は先に Benedict が指摘した「嘲笑」による制裁にふれ、「……のくせに」といった、性別、家庭内の序列による訓練、また青年の男女関係における「罪悪感」について筆をすすめている。

児玉・松山・日根野による
「子供から見た親」の態度

	多少・とてもきびしい	
	男	女
しつけ	中学1年 (52%)	小学6年 (43%)
男女交際	中学1年 (21%)	中学3年 (33%)
勉強と遊び	中学1年 (71%)	小学6年 (67%)

幼児期以後の子どもの発達過程において、どのような行動が、誰によって、どのような程度に、容認または奨励され、あるいは、干渉、拘束、または否認されるかについての実証的研究は非常に少いように思われる。日本においては、僅かに児玉省・松山淑子・日根野美穂子（一九五一）による、小学四年、六年、中学一年、三年及び高校の生徒一、六〇〇名を対象とした質問紙による「子供から見た親」の調査中に、「しつけ」、「男女間の交際」、「勉強と遊び」等について親の干渉——放任の程度を見たものがある⁽²⁹⁾。これによると、男子にあっては、中学一年において、どの項目についても親の態度を「きびしい」と感じ、女子にあっては、

ては、「しつけ」、「勉強と遊び」について小学六年のときに、「男女の交際」について中学三年のときに、「きびしい」と感ずる生徒の数が多い。しかし、これは、子どもの主観に映じた親の多少命令的または強圧的指導であ

って、実際に親が、どのような場合にどのような内容形式をもって「きびしかった」のか明らかでない点、また小学校低学年、高校の各学年、またそれ以後のデータを欠いている点で、Benedict の論点を検証するには十分であろう。依田新⁽³⁰⁾は、昭和十四年に、当時の高等女学校生徒、一・二・三および五年生計三三二名に「反抗」の調査を実施し、生徒が、親の「権威による強制圧迫」、「自由の束縛・干渉」、「叱責」に対して「反抗したくなるときがある」と答えた場合を整理して、高女一年（今の中学一年に相当）において最高で学年とともに減少する傾向があることを認めた。この研究は、青年期の心理の理解のために興味深い示唆を与えてくれるが、しかし児玉らの研究と同様に、親の実際行動の客観的記述でなく、かつ戦後の中学生については、同様の結果が必ずしも期待されないのではないかと思われる。今後この方面の研究の進展が望まれる。

Martin, W. E. および Stendler, C. B. (1953)⁽³¹⁾ は、一つの社会あるいは集団において、どのようなパーソナリティが形成されるかについては、結局、乳児期の自由度、その後の拘束度、賞罰のシステム、行動の規範および社会の期待といったものすべてがパーソナリティを規定するものであり、子どもは、乳幼児期・児童期を通じての家庭内また地域社会における人間関係によって社会化される過程において、その社会の文化をパーソナリティに表現するものであるとのべて、一つの特別な社会においていかに子どもがその社会に特有のパーソナリティを獲得するかを研究する際には、次のような問題が、考察されなければならないとのべている。

(1) 成人の子どもに対する態度、それが育児行動にどのように表現されているか。成人は子どもに対して、何をもって臨むか、敬意、軽べつ、溺愛、偽り、嘲り、無視あるいは残酷さ。

(2) その社会は、子どもへの期待と取扱いにおいてどの程度の首尾一貫性をもっているか。その期待することの相互間において、また育児あるいは訓育の行動において、どの発達段階においても、一貫した性質をもっているか。あるいは、どこかに一貫性が破れる時期があるか？

(3) どのような役割行動が子どもに期待されているか。性別、家庭内序列、また社会階層や年齢段階の相違によって役割に変化がおきるか。おきるとすればどのような変化か。

(4) その社会は、すべての子どもにどんな期待をもっているか。協力的なことか競争的なことか、勤勉であることか、野望を抱かぬことか、積極果敢なことか？

(5) そうした期待を社会はどのように教えているか。誰が社会化のにない手か。どんな教育法、賞罰の方法があるか。賞と罰とどちらが強いか？

(註)

- (1) Kluckhohn, C.: "Covert Culture and Administrative Problem", *Amer. Anth.*, XIV, 1943.
- (2) Sears, R. R., Maccoby, E. E. & Levin, H: *Patterns of Child Rearing*, Evanston, Ill.: Row, Peterson & Co., 1957, 314~319.
- (3) Davis, A. & Havighurst, R. J.: "Social Class and Color Differences in Child-Rearing", *Amer. Socio. Rev.*, II, Dec., 1946, 698~710.
- (4) Havighurst, R. J & Davis, A.: "A Comparison of the Chicago and Harvard Studies of Social Class Differences in Child Rearing", *Amer Socio. Rev.*, 20, Aug., 1955, 438~442.
- (5) Maccoby, E. E., et al.: "Methods of Child Rearing in Two Social Classes", (in) *Readings in Child*

Development edited by Martin, W. E. & Stendler, C., New York: Harcourt Brace and Co., 1954, 380~396.

- (9) Littman, R. A., Moore, R. C. & Pierce-Jones, J.: "Social Class Differences in Child Rearing: A Third Community for Comparison with Chicago and Newton", *Amer. Socio. Rev.*, 22, Dec., 1957, 694~704.
- (7) 堀内敏夫: 指導『体系教育心理学辞典』(城戸・依田・増田・阪本共編) 岩崎書店 一九五二 二〇六頁。
- (8) 辰見敏夫: 理想・宗教・道徳の発達『体系教育心理学辞典』(城戸他共編) 岩崎書店 一九五二 一二六頁。
- (6) Littman, R. A., R. A., et al., *ibid.*, 700.
- (10) Sears, R. R., et al., *ibid.*, 319~361.
- (11) Mead, M.: "Contrasts and Comparison from Primitive Society", *The Annals of the Amer. Academy of Political and Social Science*, 160, 1~6.
- (12) Dennis, W.: "The Socialization of the Hopi Child," (in) *Language, culture and Personality*, edited by Sapier, L. et al, Sapir Memorial Publication Fund, 1941.
- (13) Davis, A. & Havighurst, R. J., *ibid.* 及び Havighurst & Davis, *ibid.*
- (14) Littman, R. A et al, *ibid.*
- (15) Newcomb, T. M.: *Social Psychology* 1950. (『社会心理学』[森・万成共訳] 培風館 一九五六 四三九頁)
日本の教育史における賞罰の方法の変遷については、次のものが興味深い。
石川謙「賞罰の歴史的変遷——とくに寺小屋の場合——」『教育心理』第三卷第二号、日本文化科学社 一九五五、一〇二—一〇三頁。
- (16) 長島貞夫: 『児童社会心理学』 牧書店 一九五六、一六五—一六七頁。
- (17) *Whitehouse Conference on Child Health and Protection, Sec. III: The Young Child in the Home*, Appleton Century Co., 1936, 415. (津守真: 社会階級と子供の扱い方及びその影響との関係「児童心理と精神衛生」第四卷第四号、一九五四、六〇—八〇(よる))

- (18) Benedict, R.: *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture* Boston, 1946. (『菊と刀』、「長谷川松治訳」社会思想研究会、一九五二、三六五—三六九頁)
- (19) 塩川武雄、両親の此責と子供の反応、「日本心理学会第二四回大会発表論文集」一九五八、三四六—三四七頁。
- (20) 石黒大義「人母—子供関係の心理学的研究(その一)」—乳幼児期のしつけ方の実態—、『名古屋大学教育学部紀要』第一巻、一九五五、七四—八六頁。
- (21) 辰見敏夫：既出。
- (22) 水原泰介・島袋弘子・藤田輝子、家庭での子供の扱い方とクラス内での人気、「児童心理と精神衛生」第五巻・第四号、一九五五、一一—八頁。
- (23) Mead, M., *ibid.*
- (24) Du Bois, C.: "The People of Alor" (1944), (in) *The Psychological Frontiers of Society*, edited by Kardiner, A., Columbia Univ Press, 1945.
- (25) Eggan, D.: "The General Problem of Hopi Adjustment", (in) *Personality in Nature, Society and Culture*, edited by Kluckhohn, C. & Murray, H. A., New York, Knopf, 1948, 220—235.
- (26) Goldfrank, E.: "Socialization, Personality, and Structure of Pueblo Society", (in) *Personal Character and Cultural Milieu*, edited (rev. ed.) by Haring, D., Syracuse Univ. Press, 1949, 247—71.
- (27) Benedict, R., *ibid.* (『菊と刀』既出)。
- (28) 高木正孝、日本人の生活心理、創之社、一九五四、一〇七—一〇頁、一三九—一四九頁。
- (29) 児玉省、松山淑子、日根野美穂子「親から見た子供、子供から見た親」、『青年心理学(上)』〔児玉省著〕、日本女子大学、一九五二、六〇—八五頁。
- (30) 依田新「青年期に於ける反抗」『教育心理研究』一九四〇、(依田新『青年の心理』培風館、一九五〇、九三—一〇八頁)。
- (31) Martin, W. E. & Stendler, C. B.: *Child Development: the Process of Growing Up in Society*, New York, Harcourt, Brace & Co., 1953, 203.

第四節 親の育児態度の諸様式

前節において、ある社会における特有なパーソナリティは、乳幼児期のみならず、その後の発達過程における家庭および地域社会による人間関係によって形成されるであろうということを知ったが、ここで最近わが国においてしばしばとりあげられている親の育児態度の諸様式について簡単にふれておこう。

Fromm, E. (1941)⁽¹⁾は、哺乳や排泄をめぐる育児様式を性格形成に対する直接的要因とみるより、むしろそれを他人との交渉の様式と見なすならば、それは性格形成の過程を理解する鍵となるだろうとのべているが、長島も、人間関係ことに家庭のなかに展開される人間関係を重視して、Cattell, R. B. にならって家庭のシンタリテイ (syntality) の研究についてふれている。⁽²⁾ 家庭のシンタリテイといっても、親と子、夫婦間、きょうだい間またその他の家族との諸関係がある。

杉溪一言、石井哲夫 (一九五五) は、幼児期におけるきょうだい関係の実験的研究を行い、家族関係のダイナミックスにおいて、きょうだいの行動をとらえるための一つの手がかりを示している。⁽³⁾

きょうだい関係の性質と意義、またその親和関係、きょうだいげんか、きょうだい意識については、塩田芳久 (一九五八) の所論および一、〇〇〇名にのぼる小学五年、中学一年、三年生についての調査結果が報告されている。⁽⁴⁾ また子どものパーソナリティの調和的発達をうながすのに必要な両親の夫婦間の問題についての研究 (四

八七組に夫婦の要求不満、けんかについて調査したものが、近藤貞次、太田雅夫、林英夫によってなされた⁽⁵⁾。親子間の人間関係、特に親の育児態度の諸様式と子どものパーソナリティについては、おびただしい研究がある。

米国において親子関係の重要な機能である拒否とか溺愛が子どものパーソナリティの諸特性を形成するとして、この問題に臨床的経験から仮説を立てたのは、Levy, David (1929) であるが、その後、Witmer, Helen L. (1933)⁽⁷⁾, Symonds, P. M. (1939)⁽⁸⁾, Baldwin, A. L. (1944)⁽⁹⁾, Radke, W. J. (1946)⁽¹⁰⁾ の検証的研究がつづいて報告され、Cattell, R. B. (1950)⁽¹¹⁾ は、シンタリティーという言葉を提唱して、家庭の中の人間関係、特に親の子どもに対する態度の研究には、臨床的方法、因子分析的方法等のいろいろな角度のあることを指摘している。日本では、依田新が Symonds および Radke の研究を詳しく紹介し、長島は、Baldwin および Cattell の諸様式について記している⁽¹³⁾。辻正三は、要領よく諸説を概観し、石黒大義は、親の態度と子どもの性格との関係の一般的問題についての論文や、また藤原喜悦と共同して因子分析的研究の報告をしばしば発表している^(15,16,17)。水原泰介、井田薫子は Radke の方法に準じて行った研究を報告し、中西昇、小西勝一郎、谷嘉代子らも同様、親の態度と、教師の品等や、直接観察法、投射法によって包括的な研究を行った⁽¹⁹⁾。また品川孝子、品川不二郎は、親の態度と子どもの問題行動との関連を考察するために Symonds の様式にならって「親子関係診断テスト」の標準化を行い、その利用度を検討している⁽²⁰⁾。表は、従来の研究者、研究法、親の態度の諸様式および子どもの行動特性を、Radke や石黒のものにならって一括して示したものである。

研究者	研究法	親の態度の様式及び諸因子	子どもの行動特性										
Zimmerman (1931)		拒否的 溺愛的	攻撃的 幼児的・退行的・攻撃的										
Witmer (1933)(7)		拒否的 溺愛的	乱暴・反抗・ うそつき・しつと等										
Newell (1936)(12)		拒否的 溺愛的	不安の感情・服従的・臆病・劣等 感・依存										
Grant (1939)		拒否的 溺愛的	攻撃的・加虐的・不安の感情 幼児的・退行的・服従的・神経質										
Symonds (1939)(8) 稲田 準子 (一九五三) (22)	行動の目録表 (一八三項目) 人格診断表 面接者報告(七八項目) S's: 二八	<table border="1"> <tr> <td rowspan="2">保護(愛容的)</td> <td>干渉しすぎ</td> <td>甘やかし</td> <td rowspan="2">両面性 矛盾性</td> </tr> <tr> <td>支配的</td> <td>服従的</td> </tr> <tr> <td></td> <td>厳しすぎ</td> <td>無関心(無視)</td> <td></td> </tr> </table> 拒否的	保護(愛容的)	干渉しすぎ	甘やかし	両面性 矛盾性	支配的	服従的		厳しすぎ	無関心(無視)		保↓情緒的安定、おだやか、思慮あり、親切、熱心 拒↓不安定、活動過多、反抗的、冷淡、白昼夢、盗み 支↓従順、正直、注意深い、自己意識的、退嬰的 服↓独立的、独創的、機智に富む 攻撃的、不従順、不注意
保護(愛容的)	干渉しすぎ	甘やかし		両面性 矛盾性									
	支配的	服従的											
	厳しすぎ	無関心(無視)											
Baldwin at. al. (1944)(6)	Fels 研究所案 両親行動評定尺度 (四類型、三〇項目)	1、専制的で拒否的で無関心 2、専制的で拒否的だが無関心でない 3、専制的だが拒否的でも無関心でもない 4、承認され民主的だが甘やかされていない	無関心・放任的態度↓ 社会的・創造力と計画性に富む 一方友情的でない。 社会性低い。										

<p>Cattell (1950)(9)</p>	<p>Radke (1949)(19) 水原 泰介 井田 薫子 (一九五三) 中西 昇⁽¹⁸⁾ 小西勝一郎 谷 嘉代子 (一九五三) ⁽¹⁹⁾</p>	
	<p>質問紙調査法 (一二七項目) 幼稚園教師による評定 (二〇項目) 面接調査観察資料 (親および子) 投射法 Radke—Ss' 四三例 水原・井田 中西・小西・谷 一一四〜一五一例</p>	
<p>1、愛情のある態度—冷淡、無関心 2、承認的(責任ある態度)—拒否的 3、敵意・加虐的—攻撃性がない 4、支配的(強制命令的)—服従的 5、子どもに対して競争的—信賴的 6、誇りにしている—恥じている</p>	<p>1、専制的—民主的 2、制限の嚴格—緩和 3、罰の嚴重—寛大 4、親子関係の親密—疎遠 5、子どものしつけに対する親の責任の分担の有—無</p>	<p>5、承認され甘やかされているが民主的でない 6、承認され甘やかされて民主的な型 7、甘やかされて承認されておらずまた民主的でもない</p>
	<p>専↓他の子どもに人気なし、けんか早い、思いやりなし、情緒不安定、大胆、賞罰に無関心 民↓人気あり、思いやりあり、素直、他人と協力的、大人に依存せず 制限厳↓競争的でなく、受動的、人気なし 罰厳↓競争的でなく、他人の意見に無感覚、思いやりなし、人気なし 平等分担↓競走心少く、従順でなく統率性高い</p>	

<p>Glueck, and Glueck, E. (1953)(22)</p>	<p>S's 非行少年</p>	<ol style="list-style-type: none"> 7、友人的一社会的距離をもつ 8、保護的、心配しすぎ一大胆に子供自身に委せる 9、要求的一独立的 	
<p>平沢良助 (一九五二) (24)</p>	<p>青木「児童生育調査法 試案」改訂 長島・山崎「適応性診 断テスト」 S's 一〇八名</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1、適度の指導と自由を与えるもつとも好ましい型 2、干渉・統制しすぎる型 3、干渉・統制のない型 	<p>2 ↓ 適応困難を発生させ易い</p>
<p>長島貞夫 (一九五三) 石黒大義 藤原喜悦 (一九五四) (15,16)</p>	<p>質問紙法 (八領域二四項目) 因子分析法</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1、合理(民主)型 2、溺愛型 3、専制型 4、放任型 5、拒否型 <p style="text-align: center;">因子 強制—愛情</p>	
<p>岩淵由之 (一九五四) (25)</p>	<p>質問紙法 (十五項目、児童記入)</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1、合理型 2、溺愛型 	<p>合理 ↓ 自尊感情、自己統制、社会的技術、家庭関係一すべてよい。</p>

<p>品川 孝子 品川 不二郎 (一九五六 —五八) (20)</p>	<p>田研式「親子関係診断 テスト」 親記入三部門二四項目 子記入三部門二四項目</p> <p>S's 親、六二五例 子、四〇三例</p>		<p>拒否↓反社会性、非社会性、自己 評価、興味、意志の問題、神 経質、学力、能力の問題</p> <p>保護↓非社会性</p> <p>服従↓非社会性、退行、生活習慣 の問題</p> <p>矛盾不一致↓一般的に問題が多い</p>
	<p>長島、山崎「適性診断 テスト」</p>	<p>3、圧迫型 4、放任型 5、拒否型</p>	<p>圧迫↓神経質傾向、劣等感、統率 性にかける。</p> <p>家庭・学校関係悪い。</p> <p>放任↓自尊心低い。</p> <p>自己統制悪い。</p> <p>家庭関係わるい。</p>

この表には示されていないが、Baldwin は、彼の四つの類型（民主・溺愛・専制・拒否）および三〇項目の評定のための行動変数は、結局三種の次元に還元できることを見出した。

次に掲げるのは、長島によって指摘された Symonds の四因子および二形式との対応である。⁽²⁶⁾

Baldwin の3次元		Symonds の因子及形式
(1)	家庭の暖かさ……………	保護的—拒否的
(Family warmth)		
(2)	没入・献身・溺愛——冷静・冷淡・敵意・嫌悪	一貫性—— 矛盾性 両面性
	態度の知的客観性……………	
	合理的——情緒的	
(3)	子どもを強制する態度……………	支配的——服従的

長島は、親の態度の記述には、右の三種の基本的次元によることと、またこの次元の組合せの様態あるいは優勢な次元に注目して、民主・専制・溺愛・拒否・放任などの諸様式にわかつか、干渉しすぎ、甘やかしすぎ、きびしすぎ、無関心などに分類することが、研究の現段階では妥当であり、またひろく一般におこなわれていることであるとのべている。

こうした研究のほかに、大西誠一郎、石黒大義、久世妙子、水山進吾（一九五七）は、親子間の情緒的關係について一〇問からなる質問紙法を考案し、小学四年から中学三年に至る男女約六〇〇名に答を記入させている。そして親子間のむすびつきを、教師や他人のそれと比較して、親子間のむすびつきが学年や問題場面に關係なく常にもっとも密接なことを見出し⁽²⁷⁾ている。

親子關係の研究には、そのとりあげる側面と方法に種々あって、一般に質問紙法によって親自身にあたって親

の態度を明らかにする方法によっているが、最近では岩淵由之⁽²⁵⁾、品川⁽²⁰⁾、大西⁽²⁷⁾らの研究が試みているように、子どもを通して両親の態度をとらえようとする方向、またその結果と親自身に当って得た結果と比較して考察をすすめる方法が生れていることは非常に意義深い。また、質問紙を構成する際に、どのような場面におけるどのような行動を判定の材料にするかは、きわめて重要であり、既に、石黒・藤原の八領域^(15,16)、岩淵の一五場面⁽²⁵⁾、大西の一〇事態⁽²⁷⁾があるが、今後さらに工夫されて、もっとも親子関係の把握に適切な問題が作成されることを期待したい。しかし同時にこうした質問紙法には、言語機能の未熟な幼児や農村における適用に限界があるので、矢吹愛子、藤尾初穂（一九五四）らの試みたような方法⁽²⁸⁾（質問紙法を修正したり、母子を遊ばせて直接観察・保母に評価を求めた）や、チェックリストによる面接調査法、「人形遊び」等による観察法などが研究されて、親と子どもとの力動的な関係を真に把握する方法へと発展することを望むものである。諸研究法と、それをめぐる多くの問題点については、大西誠一郎の包括的な考察が行われている⁽²⁹⁾。

以上、親の育児態度の諸様式とそれをとらえる方法上の問題について省察してきたが、家庭のシンタリティーの研究には、このほか両親の性格や、家族構成上の問題⁽³⁰⁾たとえば、一人子⁽³¹⁾や欠損家庭⁽³²⁾、また木田文夫がしばしば指摘している祖父母の存在⁽³³⁾（いわゆるおばあさん子の特徴については、津留宏の研究がある⁽³⁴⁾）等々の問題についても考察を忘れることができないが、これらについては成書に譲ることにしたい。

（註）

- (1) Fromm, E.: *Escape from Freedom*. New York: Rinehart, 1941, 『自由からの逃走』〔日高六郎訳〕、一九五一。
- (2) 長島『児童社会心理学』牧書店、一九五六、一四五―二〇〇頁。

- (3) 杉溪一言・石井哲夫「幼児期におけるきょうだい関係の実験的研究」『心理学研究』第二六卷第四号、一九五五、二六八—二七〇頁。
- (4) 塩田芳久、大橋正夫「同胞関係の心理学的研究(1)」『名古屋大学紀要』第四卷、一九五八、一〇一—一〇七頁、及び「きょうだい関係」依田新編『家族の心理』、培風館、一九五八、九〇—一二五頁。
- (5) 近藤貞次・太田雅夫・林英夫「夫婦間の問題についての調査、(1)及(2)」『名古屋大学紀要』第三卷、一九五七、一二八—一三三頁、第四卷(一九五八)、一〇八—一二頁、及び『家族の心理』既出、一四九—一六五頁。
- (6) Levy, D. 1949. (依田新「人格形成の場としての家庭」『家族の心理』一—三八頁による)
- (7) Witmer, H. L.: (同 右)
- (8) Symonds, P. M.: *The Psychology of Parent-Child Relationship*, 1939.
- (9) Baldwin, A. L. et al.: "The Appraisal of Parents Behavior", *Psychol. Monog.*, 63~4, 1944.
- (10) Radke, M. J.: *The Relation of Parental Authority to Children's Behavior and Attitudes*, 1946.
- (11) Cattell, R. B.: *Personality, A Systematic Theoretical and Factual Study*, New York: Mc Grawtill, 1950.
- (12) 依田新「人格形成の場としての家庭」『家族の心理』前出、七一—二四、二五—三六頁。
- (13) 長島『児童社会心理学』既出、一四六—一四八、一五一—一五三頁。
- (14) 辻正三「親子関係と子どもの人格形成」『児童発達』(依田新編)、国土社、一九五七。
- (15) 石黒大義・藤原喜悦「溺愛・放任・専制」『児童心理』第八卷第三号、一九五四、三八—四七頁。
- (16) 石黒大義・藤原喜悦「親のしつけ態度」『児童心理』第七号、一九五四、七七—八四頁。
- (17) 石黒大義・旭妙子「乳幼児期の育て方と人格形成」『児童心理と精神衛生』第四卷第五号(23)、一九五四、六一—四頁。
- (18) 水原泰介・井田薫子「家庭での育て方と幼児のパーソナリティ」『児童心理と精神衛生』第三卷第五号、一九五三。
- (19) 中西昇・小西勝一郎・谷嘉代子「親子関係の心理学的研究」『大阪市立大学家政学部紀要』第一卷第四号、一九五三、一一—四一頁。

- (20) 品川不二郎・品川孝子『田研式親子関係診断テスト』日本文化科学社、一九五八。
品川孝子・品川不二郎「親子関係診断テストによる親の態度と子供の問題の考察」『日本心理学会第二二回大会発表論文集』一九五八、二九二頁。
- (21) Newell, H. A.: A Further Study of Maternal Rejection, *Amer. J. Ortho-Psychiat.*, 6, 1936.
- (22) 稲田準子「児童の性格と親子関係」『児童心理』第七卷第九号、一九五三。
- (23) Glueck, S. & Glueck, F.: 『少年非行の解明』〔中央青少年問題協議会訳〕、一九五三。
- (24) 平沢良介「家庭の教育態度と児童のパーソナリティ」『日本応用心理学会第一二回大会発表論文集』、一九五一年。
- (25) 岩淵由之「親の態度と児童性格」『児童心理』第八卷第一二号、一九五四、六八一―七三頁。
- (26) 長島貞夫、既出。
- (27) 大西誠一郎・石黒大義・久世妙子・水山進吾「親子関係」『家族の心理』既出、三九―五四頁。
- (28) 矢吹愛子・藤尾初穂「家庭での育て方と幼児の性格」『児童心理と精神衛生』第四卷第三号、一九五四、一一―二二頁。
- (29) 大西誠一郎「家族関係の研究における問題点」『名古屋大学教育学部紀要』第四卷、一九五八、八五―八九頁。
- (30) 長島貞夫、既出、一七五―一七八頁。
- (31) 一人子については次に学ぶことが多い。
山下俊郎「一人子の心理と教育」一九三八、
長島貞夫・既出、一八二―一八六頁。
辻正三「兄弟関係、一人子、養子その他」『幼児児童教育講座』一九五四。
津留宏『家族の心理』金子書房、一九五七。
- (32) 欠損家庭または崩壊家庭については、次を参照のこと
津留宏『家族の心理』既出。丸井文男・村上英治「家庭の病理」『家族の心理』、既出、一九八一―二一九頁。
牛島義友『家庭関係の心理』金子書房、一九五五。
継父母・継子の問題については、次を参照のこと

高木四郎、菅野重道「問題児の発生原因論」、中脩三(編)、『異常児』、医学書院、一九五二。

高木四郎ほか「継母を持つ問題児の研究」、石橋俊実(編)、『異常児』、診断と治療社、一九五八、

(33) 木田文夫『神経衰弱と性格異常』金子書房、一九五一、二六一—三〇頁。

木田文夫『児童神経症の家庭構造』「児童心理」第五卷第四号、一九五一、一七一—二二頁。

(34) 津留宏『家族の心理』既出。辻正三「兄弟関係、一人子、養子、その他」既出。

結 語

序にのべておいたように、われわれは、長野県開田村の調査報告に先立って、育児様式全般に関する、文化人類学および心理学双方の立場からする文献の整理研究を痛感したのでその概略を以上に記した。読み返してみても、多くの文献が既に他の研究者によって既に紹介され、批判されたものである点、二番煎じの感がないでもない。しかしながら、文化とパーソナリティという境界領域の問題については、各々の専門領域の文献に止らず、他の専門領域の文献をも検討することが緊要である。全体を通じて必ずしも内外の文献のとり上げ方に偏りなしとはいえないが、今後の発展に資するものと信じている。なお、農村の子ども及び農民のパーソナリティについての心理学的文献は、第二部において引用し、また若干の解説を試みる筈である。

終りに当って、この小文中に、その論文を紹介引用させていただいた諸研究者各位、特に表を借用させていただいた方々に御寛恕をお願いして、厚くお礼申上げたい。

星野 祖父
今須 江野
井 江野

本学臨床心理学専任講師
都立大学社会学部心理学助手
東京大学大学院学生「文化人類学専攻」
本学人類学講師